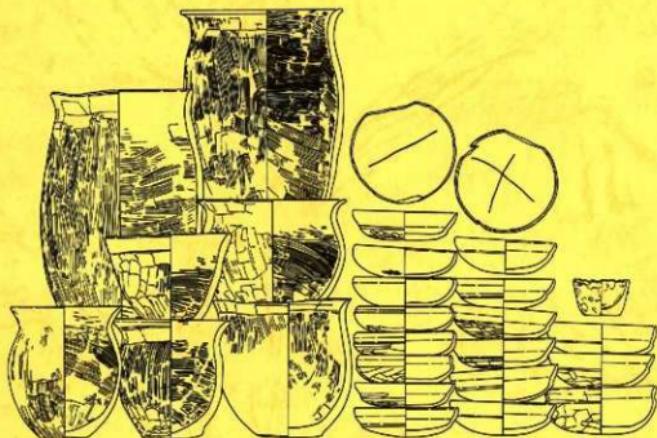


緑ヶ丘一丁目遺跡

—集合住宅建設に伴う発掘調査報告書—



2006

甲府市教育委員会

序

現在、全国的に地域の歴史や伝統文化、自然を見直し、積極的にその活用が講じられつつあります。地域にとってそれらがいかに重要であるか、あらためて実感すると併に、その保存・保護が現代に生きるものの大なる責務であると再認識いたします。

本書は、集合住宅建設に先立ち実施した『緑ヶ丘一丁目遺跡』の発掘調査報告書であります。本遺跡は、市街地の北部山裾に位置し、一帯は宅地化しておりますが、未だ豊かな自然景観を残すと共に貴重な文化遺産が点在しております。調査により縄文時代以来、古墳・平安時代に至るまで日々営み続けた人々の痕跡が確認され、連綿と続いてきた歴史の一端が明らかとなりました。

歴史あるこの地域で、今回、発掘調査が行われたことは誠に意義深く貴重なものであります。本報告書が学術研究深化への一助になるとともに、教育資料へも活用され、郷土の歴史と文化を再認識する機会となればこの上ない喜びであります。

末筆となりましたが、この度の記録保存に際し、貴重な文化遺産に対する深いご理解を賜り、ご支援・ご協力を頂いた開発者及び関係各位に、感謝申し上げるとともに、衷心より厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

甲府市教育委員会
教育長 角田智重

例　　言

1. 本書は山梨県甲府市緑が丘二丁目87-5, 87-6, 91-4, 91-5における緑ヶ丘一丁目遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、集合住宅建設に伴うものであり、開発主体者　飯島雄二氏との協議を経て発掘調査に係る委託契約を締結し、甲府市教育委員会が主体となって実施した。
3. 本調査から報告書作成に至る経費は開発主体者が負担している。
4. 本遺跡に關わる試掘調査は志村憲一（文化スポーツ課文化財主事）が、本調査は伊藤正彦（同課文化財主事）が担当した。
5. 調査の期間及び面積は以下のとおりであり、本調査終了後に引き続き整理作業に着手した。
　　試掘調査 平成17年5月11日～5月12日　　面積約 50m²
　　本調査 平成17年7月27日～9月28日　　面積 228m²
6. 本書の編集・執筆は、原 正邦（文化スポーツ課長）を責任者とし、伊藤が行った。整理作業に係る遺物洗浄・注記・接合作業、遺物実測・図面作成及び押印・写真図版の作成は清水秀樹（嘱託職員）、中村里恵（嘱託職員）、大塚敦子、栗田かず子、奥石綾奈、佐野香織、寺本仁美、西久保民子が行った。
7. 本書に關わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。
8. 本書に關わる基準点測量及び基準杭の設定は、昭和測量株式会社に、写真測量業務は株式会社フジテクノにそれぞれ委託した。
9. 発掘調査及び報告書作成に際し、次の機関・諸氏からご指導ご協力を賜った。厚くお礼を申し上げる次第である。（敬称略）株式会社レオパレス21 山梨県教育委員会学術文化財課 小泉 泉畑 大介 林 陽一郎 石神 孝子
10. 発掘調査参加者（敬称略）
　　雨宮小春 上島光子 岡 悅子 小泉正子 小宮通子 末木千並 菅沼芳治
　　花曲敬子 平賀早苗 古屋袈裟男 望月宏美 望月貴美子 渡辺百合子
11. 職場体験参加者
　　（甲府市立南西中学校）鬼塚哲也 内藤友貴 称津洋平 矢野舜大 山本大貴
　　（藤懸学園藤沢中学校）柿原 豪 犬飼 遼 北村康悟 藤井春登

凡　　例

1. 本書に掲載した遺構番号は、調査現場において付けたものである。
2. 遺構名は各遺構の形状・検出状況に応じて調査現場において付けたものである。
3. 全体図・遺構・遺物実測図の縮尺は図中に表示した通りである。
4. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示している。
5. 報告書中の方位は磁北を示している。
6. 本書に使用したスクリーントーンは、以下のとおりである。



赤 彩



黒色処理



須 悠 器



灰 軸

目 次

序
例 言
凡 例
目 次
挿図・表目次

第 1 章 遺跡環境	1
第 1 節 立地と地理的環境	1
第 2 節 歴史的環境	3
第 3 節 周辺土地利用の変遷	5
第 2 章 調査概要	7
第 1 節 調査に至る経緯	7
第 2 節 試掘調査結果	7
第 3 節 調査の方法と経過	9
第 3 章 遺構と遺物	12
第 1 節 壇穴住居址	12
第 2 節 溝状造構	28
第 3 節 集石造構	30
第 4 節 土坑	32
第 5 節 遺構外出土遺物	34
第 4 章 まとめ	41

挿 図 目 次

図 1 遺跡周辺の微地形分析図	1
図 2 遺跡の位置	2
図 3 緑ヶ丘一丁目遺跡と周辺の遺跡	3
図 4 明治24年地形図	5
図 5 大正5年甲府市明細全図	5
図 6 昭和20年市街地図	5
図 7 調査地点	6
図 8 試掘トレンド配置図	7
図 9 試掘トレンド平面図及び遺物出土状況	8
図10 試掘調査出土遺物	8
図11 緑ヶ丘一丁目遺跡全体図	11
図12 1号住居址、ピット平・断面図及び出土遺物	13
図13 2号住居址、カマド、ピット平・断面図	15
図14 2号住出土遺物	16
図15 3号住居址平・断面図及び出土遺物	18
図16 4号住居址、カマド遺物出土状況	20
図17 4号住居址、カマド、ピット平・断面図	21
図18 4号住出土遺物(1)	22
図19 4号住出土遺物(2)	23
図20 5・7号住居址平・断面図及び出土遺物	25
図21 6号住居址平・断面図及び出土遺物	26
図22 6号住出土石器	27
図23 溝状遺構出土石器	28
図24 溝状遺構平・断面図及び出土遺物	29
図25 1～2号集石平・断面図及び出土遺物	31
図26 1～4号土坑平・断面図及び出土遺物、一括出土遺物検出状況	33
図27 グリッド出土遺物	35
図28 調査区出土遺物(1)	36
図29 調査区出土遺物(2)	37

表 目 次

出土遺物観察表(1)	38
出土遺物観察表(2)	39
出土遺物観察表(3)	40

第1章 遺跡環境

第1節 立地と地理的環境(図1・2)

本市は、山梨県のほぼ中央に位置し、南北に細長い市域をなしている。長野県との境、標高2599mを測る金峰山山頂から盆地底部の低平地、標高約250m地点まで幅広い自然を含み、市域の4分の3は山地であり、標高300m未満の低地が4分の1を占めている。

本遺跡は甲府盆地の北縁部、相川が形成した扇状地の扇央部、相川右岸に位置する。相川は、扇状地西縁を南流し、荒川と合流した後、さらに盆地内を南流する。遺跡の西から北側背後にかけて湯村山・堂ノ山が迫り、東から南側前面に盆地が広がる。

微地形分析から度重なる相川・荒川の流路変更により一帯に後背湿地・旧河道の他、自然堤防・扇状地等が埋没しており複雑な地形を形成していたことが判明している。こうした成果から、調査地点一帯は扇状地地形が張り出し、住環境に適した高燥な地であったと推量できる。

調査地は市内線が丘二丁目に所在し、相川に近接する標高約285mを測る地点に位置する。縄文時代から平安時代の遺跡として周知され、一帯はすでに宅地化されている。

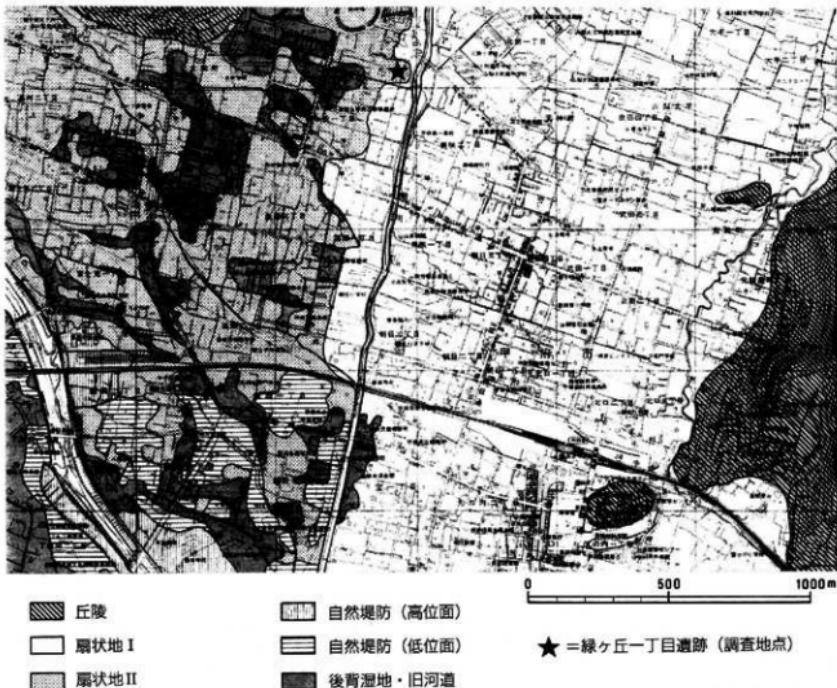


図1 遺跡周辺の微地形分析図(『塩部遺跡』山梨県埋蔵文化財センター1996年より借載)

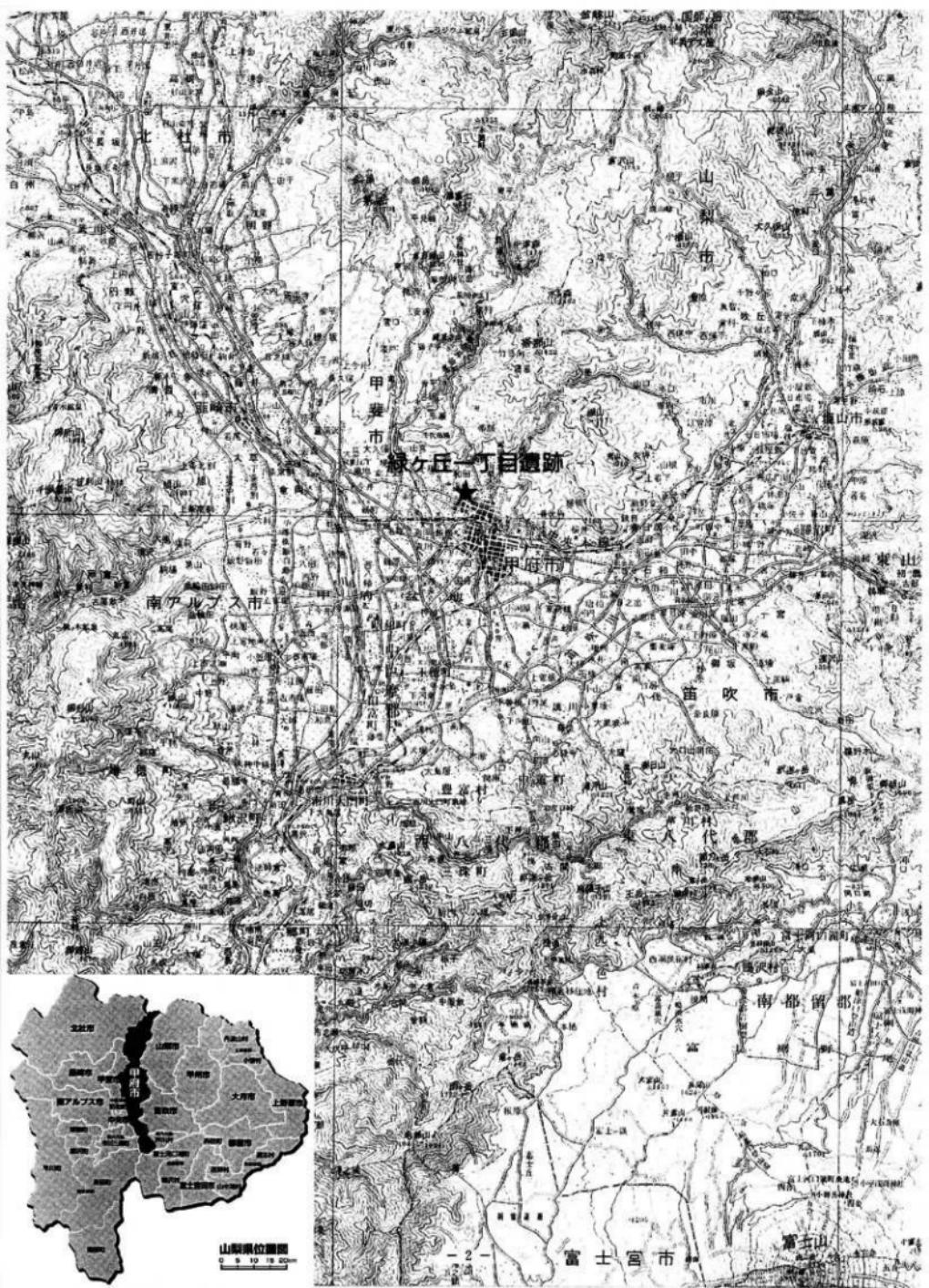


図2 遺跡の位置

山梨県位図
0 5 10 20km

第2節 歴史的環境（図3）

本遺跡が位置する市内北部一帯に、多くの遺跡の存在が知られている。特に昭和59年、当遺跡から上流数百メートルの相川河床においてナウマンゾウの臼歯化石が発見され、これにより後期旧石器前半まで遡る人間の営みが推量できることとなる。

当地で人々の足跡が認められるのは縄文時代前期後半からである。平成4年に調査された榎田遺跡(14)からは、当該期の土器・石器を検出している。本遺跡でも該期の土器・石器を確認しており、音羽遺跡(26)・塩部遺跡(36)からも縄文期の出土遺物が報告されている。他に周知の遺跡として、金塚西遺跡(18)・西大阪A遺跡(24)・西河原遺跡(28)・緑ヶ丘二丁目遺跡(52)等がある。

人々の生活の痕跡が確実に認められるのは弥生時代後半からである。前述した榎田・音羽・塩部遺跡等では平安時代まで連綿と続く集落跡が確認されており、榎田・塩部遺跡からは古墳時代前期の方形周溝墓が、富士見一丁目遺跡(32)からは同時期の水田跡がそれぞれ調査・確認されている。弥生～古墳時代にかかる遺跡は、天神北(10)・天神西(12)・跡部(16)・神田(20)・八幡前(38)・八幡東(39)・三光寺山(54)・向田A遺跡(56)など周辺に多数存在する。

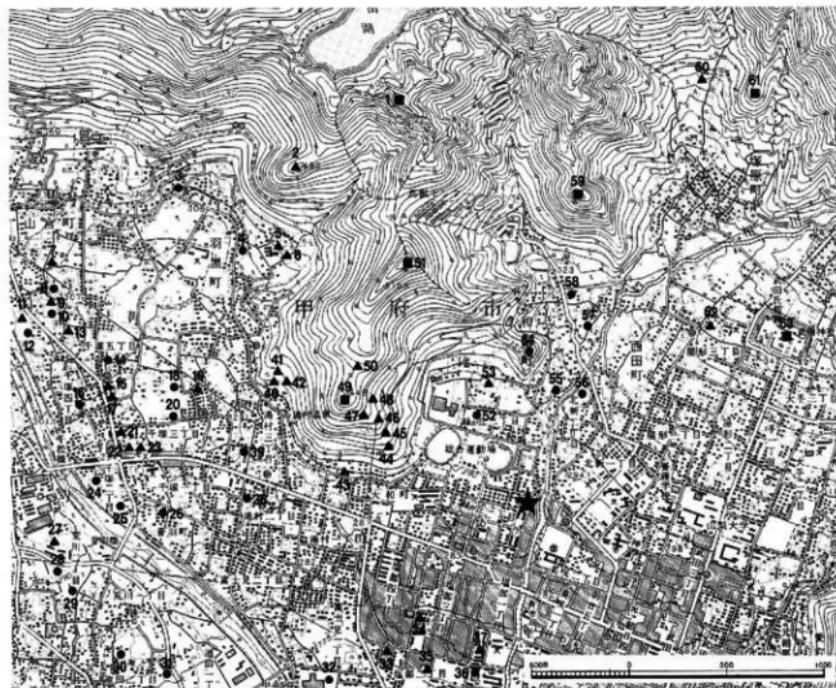


図3 緑ヶ丘一丁目遺跡と周辺の遺跡（★緑ヶ丘一丁目遺跡 ●縄文・平安 ▲古墳 ■中世城館）

本遺跡から西方、荒川左岸は「千塚」の地名が示すように6世紀中頃から大規模な古墳群が築造されてきた地である。開発によりすでに多くが消滅したようであるが、湯村山山麓から山裾にかけて多数の古墳が現存する(41~48、50)。江戸期より知られた存在だった万寿森古墳(43)は、初期横穴式石室を備え、県内有数の規模を有する。同様に江戸時代より大型の墳墓として著名であった加牟那塚古墳(19)は、直径約45m、高さ約7mを測り、東日本有数の規模を有する円墳であり、盆地西部を拠点とした有力首長の墳墓と推量されている。これらの他、穴塚古墳(27)も荒川流域で現存する数少ない古墳の一つである。

奈良・平安時代の遺跡は、前述した複田・音羽・塙部遺跡の他、平石遺跡(29)から建物跡が確認されている。周辺には若宮前(3)・天神平(4)・御歳(8)・西大阪B(25)・村之内(55)・八幡東(39)・永井(57)・十二天遺跡(58)など多くの包蔵地が知られ、古墳時代以来当地は有力氏族が居住する拠点的地域であったと考えられている。

諸資料から中世、当地一帯に志摩荘・小松荘・塙・莊などが確認できる。莊城・存続期間など不明確であるが、志摩荘・小松荘は九条家領であり、武田有義が在地領主と推定されている。戦国期、湯村山山頂に武田氏館(63)の防御の一翼を担った湯村山城(49)が築造されるほか、館背後の山嶺に監視・軍事的機能を帯びた和田の城山(1)、法泉寺山の烽火台(51)、小松山の烽火台(59)、鐘撞堂山遺跡(61)などの城砦群が構築されていた。

本文中及び図3に示した遺跡の内訳は、以下のとおりである。

- | | | |
|-----------------------|--------------------|----------------------|
| 1. 和田の城山(中世) | 2. 羽黒山古墳(古墳) | 3. 若宮前遺跡(平安) |
| 4. 天神平遺跡(平安) | 5. 大塚古墳(消滅古墳) | 6. 無名塙(消滅古墳) |
| 7. 夫婦塚古墳(消滅古墳) | 8. 御歳遺跡(平安) | 9. 天神塚古墳(消滅古墳) |
| 10. 天神北遺跡(古墳時代) | 11. 無名一号塙(消滅古墳) | 12. 天神西遺跡(古墳時代) |
| 13. 子泣塚古墳(消滅古墳) | 14. 複田遺跡(縄文前期～平安) | 15. 無名二号塙(消滅古墳) |
| 16. 塙部遺跡(古墳時代) | 17. 猪塚古墳(消滅古墳) | 18. 金塙西遺跡(縄文中期～古墳時代) |
| 19. 加牟那塚古墳(古墳) | 20. 神田遺跡(弥生後期) | 21. 鳥塚古墳(消滅古墳) |
| 22. 薬師塚古墳(消滅古墳) | 23. 証文塚古墳(消滅古墳) | 24. 西大阪A遺跡(縄文中期) |
| 25. 西大阪B遺跡(平安) | 26. 音羽遺跡(縄文前期～奈良) | 27. 穴塚古墳(古墳) |
| 28. 西河原遺跡(縄文時代) | 29. 平石遺跡(平安) | 30. 居村村上遺跡(平安) |
| 31. 前田遺跡(平安) | 32. 富士見一丁目遺跡(古墳時代) | 33. 鶴塚古墳(消滅古墳) |
| 34. 早乙女塚古墳(消滅古墳) | 35. 荒神塚古墳(消滅古墳) | 36. 塙部遺跡(弥生～平安) |
| 37. 夫婦塚古墳(消滅古墳) | 38. 八幡前遺跡(弥生後期～古墳) | 39. 八幡東遺跡(弥生後期～古墳) |
| 40. 砂石塚古墳(消滅古墳) | 41. 大平一号塙(古墳) | 42. 大平一号塙(古墳) |
| 43. 万寿森古墳(古墳) | 44. 湯村山一号塙(古墳) | 45. 湯村山二号塙(古墳) |
| 46. 湯村山三号塙(古墳) | 47. 湯村山四号塙(古墳) | 48. 湯村山五号塙(古墳) |
| 49. 湯村山城(中世) | 50. 湯村山六号塙(古墳) | 51. 法泉寺山の烽火台(中世) |
| 52. 緑ヶ丘二丁目遺跡(縄文前期～平安) | | 53. 和田無名塙(消滅古墳) |
| 54. 三光寺山遺跡(古墳時代) | 55. 村之内遺跡(平安) | 56. 向田A遺跡(弥生時代) |
| 57. 永井遺跡(平安) | 58. 十二天遺跡(平安) | 59. 小松山の烽火台(中世) |
| 60. 砂石古墳(古墳) | 61. 鐘撞堂山遺跡(中世) | 62. お塚さん古墳(消滅古墳) |
| 63. 武田氏館跡(中世) | | |

第3節 周辺土地利用の変遷

江戸時代、調査地周辺は塩部村に含まれたらしく、慶長6年(1601)「北山筋塩部之郷御繩打水帳」(『西山梨郡志』)は屋敷数19と記録し、文化11年(1814)完成の『甲斐国志』は当村について、戸数20・人数67、高1049石余と記載する。一帯は、江戸期より人家も点在しない耕作地だったらしく明治24年(1891)、陸地測量部作成の地形図は相川流域の和田・塩部両村間を大きく耕作地あるいは空閑地と表現する(図4)。明治42年、歩兵49連隊用地として連隊区司令部・衛戍病院・練兵場などが設置されたため、こうした景観が一変する。大正5年(1916)発行の甲府市明細全図は市街北西部に広大な敷地を占める兵営施設を表現し、調査地点が練兵場内であったことを伝える(図5)。敗戦に伴い兵舎等は撤去されたらしく昭和20年(1945)発行の市街地図は、連隊跡地を大きく空閑地と描いている(図6)。現在、跡地は学校・スポーツ広場等として活用し、一帯は宅地化されている(図7)。



図4 明治24年地形図



図5 大正5年甲府市明細全図



図6 昭和20年市街地図



図7 調査地点

- 6 -

第2章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

文化財保護法に基づき平成17年1月25日、緑ヶ丘一丁目遺跡包蔵地内において集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これにより市教育委員会は、既存建物の解体を待って、同年5月11日より試掘調査を実施し、開発予定地内で埋蔵文化財を確認した。調査結果を踏まえた6月7日、工事主体者・施工責任者・市教委の三者で協議を行い、提出された工事計画では埋蔵文化財を破壊するため保存処置が必要であること、設計変更等により保存処置を講じよう要望すると併に、市教委に委託し記録保存を行う場合は原図に費用負担を求めるなどを説明した。その後数回の協議を経た7月25日、原図者と市教委で発掘調査及び報告書作成業務に関わる委託契約を締結し、工事に先立ち集合住宅の建設範囲228m²を対象に埋蔵文化財の記録保存を行い、地域の歴史を伝える資料として保存・活用することとした。

第2節 試掘調査結果(図8・9、図版1)

すでに平成16年、分譲住宅建設に伴い本調査地点の北側隣接地において試掘調査を実施し、古墳時代後期の堅穴住居址2棟の他、掘立柱建物址・溝・ピットなどとともに多数の土器を確認していた。本建設計画に際しても遺構・遺物の検出は十分予想されたため詳細な調査データを得る目的で試掘調査を実施した。当該地に幅2mの試掘坑を延べ30mにわたり設定し、重機により表土を除去後、人力で精査・確認を行った。旧建物建設に際し、部分的に掘削を受けているもの地表下40cmから遺物の出土が確認でき、一括性の高い土器集中箇所なども確認され、試掘坑全体から土器等の出土がみられた。こうした結果を踏まえ当該地に遺跡が存在し、依然として良好に埋蔵されていると判断した。

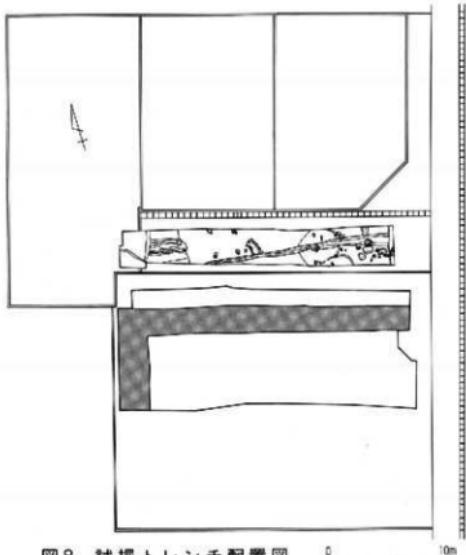


図8 試掘トレンチ配置図



試掘調査状況



遺物出土状況

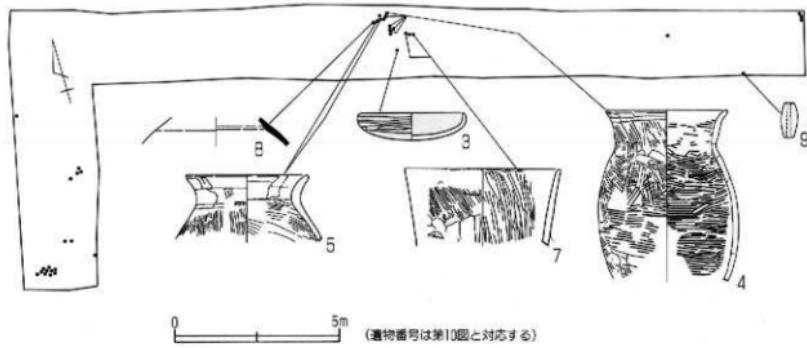


図9 試掘トレンチ平面図及び遺物出土状況

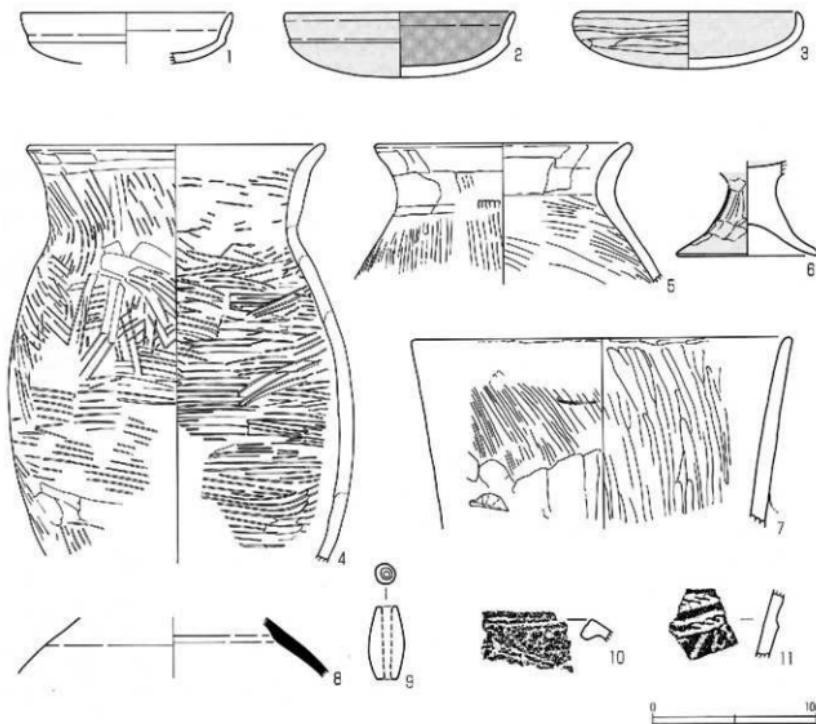


図10 試掘調査出土遺物

第3節 調査の方法と経過

発掘調査は、平成17年7月27日から9月28日まで行った。調査範囲の表土等を重機により除去した後、人力にて造構・遺物の検出に努めた。造構検出に際し、規模・形状・重複の有無等を確認するため半截・トレンチ調査により堆積土層を確認しつつ調査を行った。出土遺物に関し、造構確認に先立ち出土した一括性が高いものについては原則として出土地点を記録しつつ調査を行ったが、それ以外はグリッド一括遺物として扱った。造構に伴う出土遺物は一括性が高いもの、底面出土のものを記録し、それ以外は各造構の一括遺物とした。造構の記録は、10分の1、もしくは20分の1で測量及び図面作成を行い、全体図は航空写真測量により作成した。調査・測量の基準として、国家座標に基づく基準点の設置、調査区内へ4m間隔で木製杭を打設し、グリッド番号は、北から南方向へA・B・C・D・E、西から東方向へ1・2・3・4・5とした。記録写真は、遺物の出土状況、造構の検出状況、土層の堆積状況を主に撮影した。発掘調査終了後、引き続き整理作業を実施し、出土遺物の洗浄・注記、実測遺物の選定、図化・トレース作業を行った。報告書刊行まですべての業務が完了したのは平成18年3月末であった。

発掘調査期間中の8月10・11日に市立南西中学校の生徒5名が、同11・12日に藤嶺藤沢学園の柿原豪教師が引率する生徒3名が、それぞれ職場体験として発掘作業に参加している。同11日には当発掘現場を会場として、夏休み親子考古学教室を開催し、市内在住の親子9組20名が発掘作業を体験した。

〈調査日記抄録〉

- 7月27日（水）発掘機材等を搬入する。
- 7月28日（木）試掘トレンチより記録後出土遺物を取り上げる。大部分が古墳時代後期に属し、深掘り地点より縄文土器が出土する。
- 7月29日（金）重機にて表土除去、順次造構確認作業を開始する。（30日まで）
- 8月3日（水）精査、造構確認作業を行う。古墳後期窯・壊破片多数出土する。
- 8月5日（金）造構確認作業にともない広範囲な搅乱の痕跡を確認する。
- 8月8日（月）トレンチ調査により礫集中箇所を確認する。溝状造構となるか。
- 8月9日（火）礫集中箇所の範囲確認のため新たにトレンチ設定、掘り下げを行う。同様に礫が集中し、溝状造構とする。集石造構を二箇所確認する。
- 8月10日（水）集石造構に十字にトレンチ設定、掘り下げを行う。
- 8月12日（金）重機にて堆土搬出。溝状造構の平面プランを確認する。
- 8月16日（火）溝状造構、土層堆積状況の記録写真撮影・実測を行う。
- 8月17日（水）1号住を確認する。



親子夏休み考古学教室開催風景



職場体験風景

- 8月22日（月）基準点・グリッド杭の設置を行う。
- 8月24日（水）集石遺構下層に2号住を確認する。
- 8月30日（火）3号住カマドを確認、D-6・7Gにて住居址を重複して確認する。
- 9月1日（木）1・2号集石平・断面図作成、4号住を確認する。
- 9月2日（金）3号住カマドを半截、土層堆積状況を実測する。4号住掘り上げ、遺物が多数出土する。
- 9月8日（木）溝状遺構、礫検出状況の記録写真撮影。3号住カマドの平面実測を行う。
- 9月9日（金）3・4号住の重複状況を確認する。
- 9月13日（火）1号住よりピット2基礎認、2号住カマドプランの確認を行う。
- 9月14日（水）4号住出土上遺物を実測、C-1G下層の縄文遺構確認を行う。
- 9月15日（木）D-3Gにて6号住を確認する。4号住カマド検出状況を実測する。
- 9月16日（金）2・6号住の重複状況を確認する。
- 9月20日（火）7号住より炭化材が出土、記録写真を撮影する。
- 9月21日（水）6号住遺物出土状況の実測、取り上げを行う。
- 9月22日（木）4号住よりピット8基礎認、記録図面を作成する。6号住完掘状況を実測する。5・7号住の重複状況を確認する。
- 9月23日（金）航空写真測量を実施する。
- 9月26日（月）出土遺物・機材の搬出を行う。
- 9月27日（火）重機にて埋め戻し開始、翌日終了。



調査状況



土器出土状況



遺物注記作業



遺物実測作業

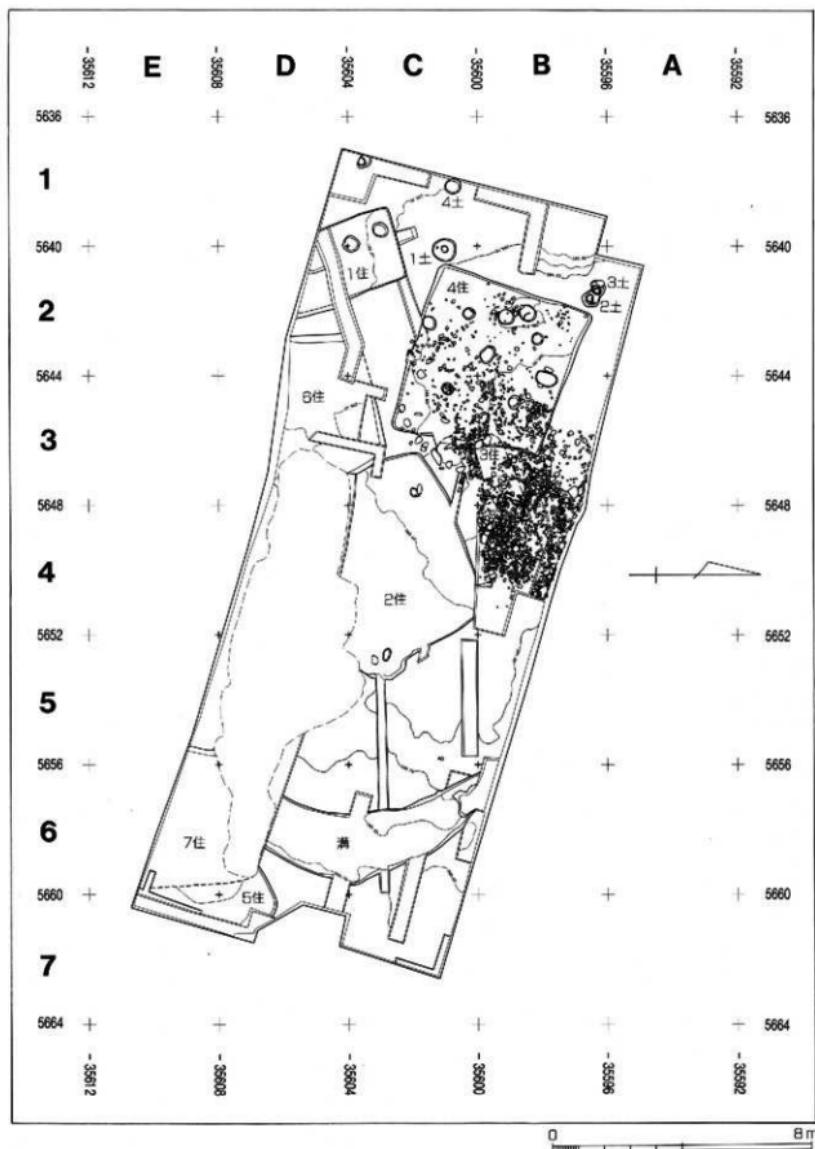


図11 緑ヶ丘一丁目遺跡全体図

第3章 遺構と遺物

遺物とともに竪穴住居址7棟、集石遺構2基、溝状遺構1条、土坑3基を確認している。検出遺構・出土遺物の大部分が古墳時代後期に属す。

第1節 竪穴住居址

1号住居址（図12、図版1）

精査掘り下げに際し遺物集中と黒色土の広がりを検出し、トレーナーを設定して遺構範囲及び掘り込みを確認した。遺構の大半は調査区外に広がりカマドも確認されず、住居址中央に搅乱を受けている。古墳時代後期の住居址である。

（位置）調査区西側、C-D-1・2グリッドで確認する。

（規模・形状）南北3.54m、東西2.42mを測り、隅丸方形を呈する。掘り込みは、南側が0.34mと深く、東壁から西壁にかけて10cm程度であった。

（覆土）搅乱を受けているため西壁の立ち上がりは判然としなかった。4層からなり、焼土・炭化物が多く混入していた。

（遺物出土状況）遺構確認段階で数箇所に集中する状況であった。掘り下げに際し出土した点数は僅かで、単独かつ散在して検出される状況であった。

（内部施設）ピット3箇所を確認した。ピット1は長径0.48m、短径0.43m、深さ0.20mを測る。出土遺物は小片のみ僅かであった。ピット2は長径0.51m、短径0.47m、深さ0.34mを測る。出土遺物は数点であるが、3点を図化した（図12-4～6）。ピット3は搅乱を受け、かつ一部のみの検出であった。長径0.86m、深さ0.18mを測る。出土遺物は小片のみであった。

（出土遺物）住居址・ピット出土遺物6点を図化した。1は内面を黒色処理した壺、2～5はハケ整形される甕の破片、6は甕の体部片である。



1号住居址 挖出状況

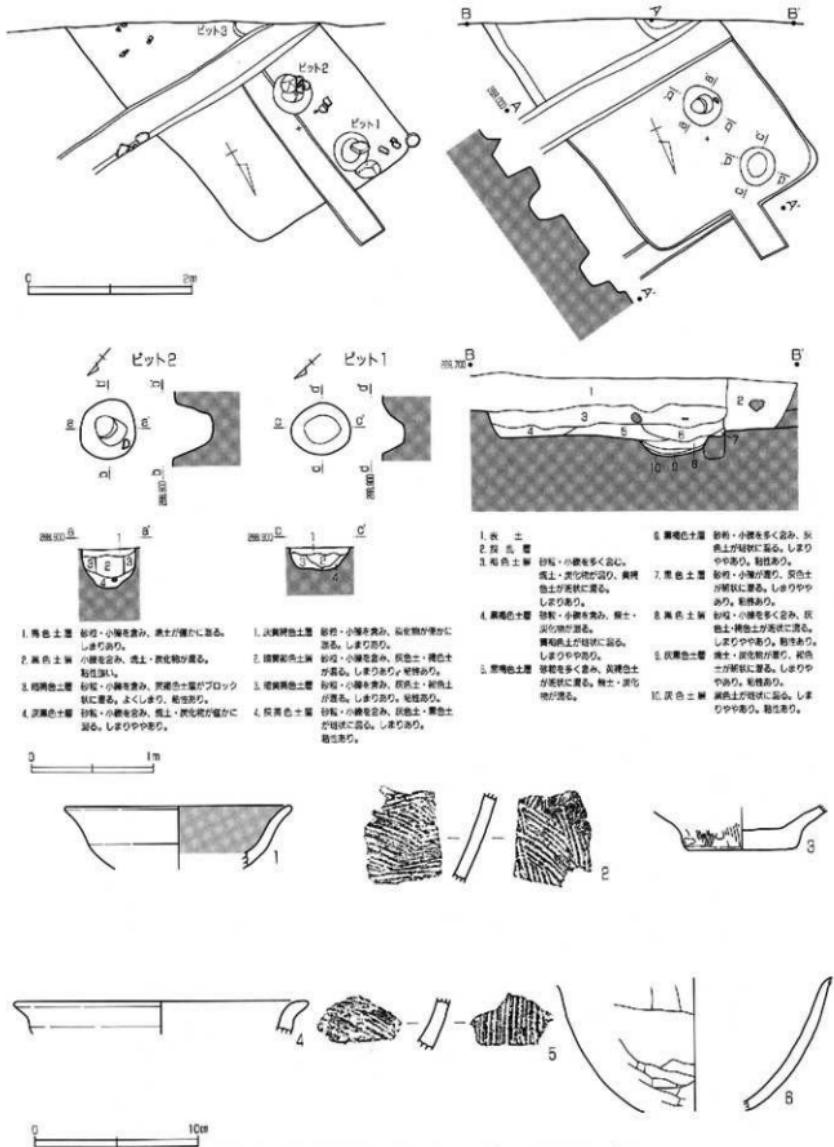


図12 1号住居址、ピット平・断面図及び出土遺物

2号住居址（図13・14、図版1・2）

集石造構掘り下げに際し焼土の広がり、カマド袖石を検出し、土層堆積状況から重複し下層に存在していることを確認した。上層造構を記録後、レンチを設定して範囲及びプラン確認を行った。住居址南側に搅乱を受け、3・6号住居址と重複している。古墳時代後期の住居址である。

（位置）調査区の中央、C・D-3・4グリッドで確認する。

（規模・形状）東西5.86m、南北4.46mを測り、隅丸方形を呈する。掘り込みは、西壁が0.32m、東壁0.22m、北壁は0.16mであった。

（覆土）5層からなり、レンズ状堆積の様相が見える。焼土・炭化物を多く含み、黄褐色土が斑状に混入していた。

（遺物出土状況）カマドの前面、正位に置かれた環が4点集中して検出された（図14-1～4）。3点までが赤彩されておりカマド廃絶に伴う祭祀行為の過程で残されたものであろう。掘り下げに際し出土した大部分は破片資料であり、単独かつ散在して検出される状況であった。

（カマド）廃絶に伴い規模・構造など判然としないが、袖石の抜き取り痕・焼土の広がりから長軸1m、短軸80cm程度の規模となろう。床面と区画するためか、5cm程度の高まりが一部にみられた。煙道部は確認できていない。

（内部施設）床面に踏み固められた様相など窺えず、ピットを一箇所確認したのみである。長径0.46m、短径0.36m、深さ0.14mを測り、出土遺物は確認できなかった。

（出土遺物）図化したもののすべてが住居址出土遺物である（図14）。1～14は古墳時代後期の环・甕・高环、15～17は弥生時代中・後期の甕、18は黒曜石で、使用痕のある剥片である。环は丸底で半球形となるもの（1・7）、内湾口縁环などと呼ばれ丸底で口縁部との境に稜を有するもの（2～6）があり、器面整形はヘラ削り後、ナデ・ヘラ磨きによって仕上げられている。甕は外面縱方向、内面横方向にハケ整形されている。



2号住居址 挖掘状況



土器出土状況

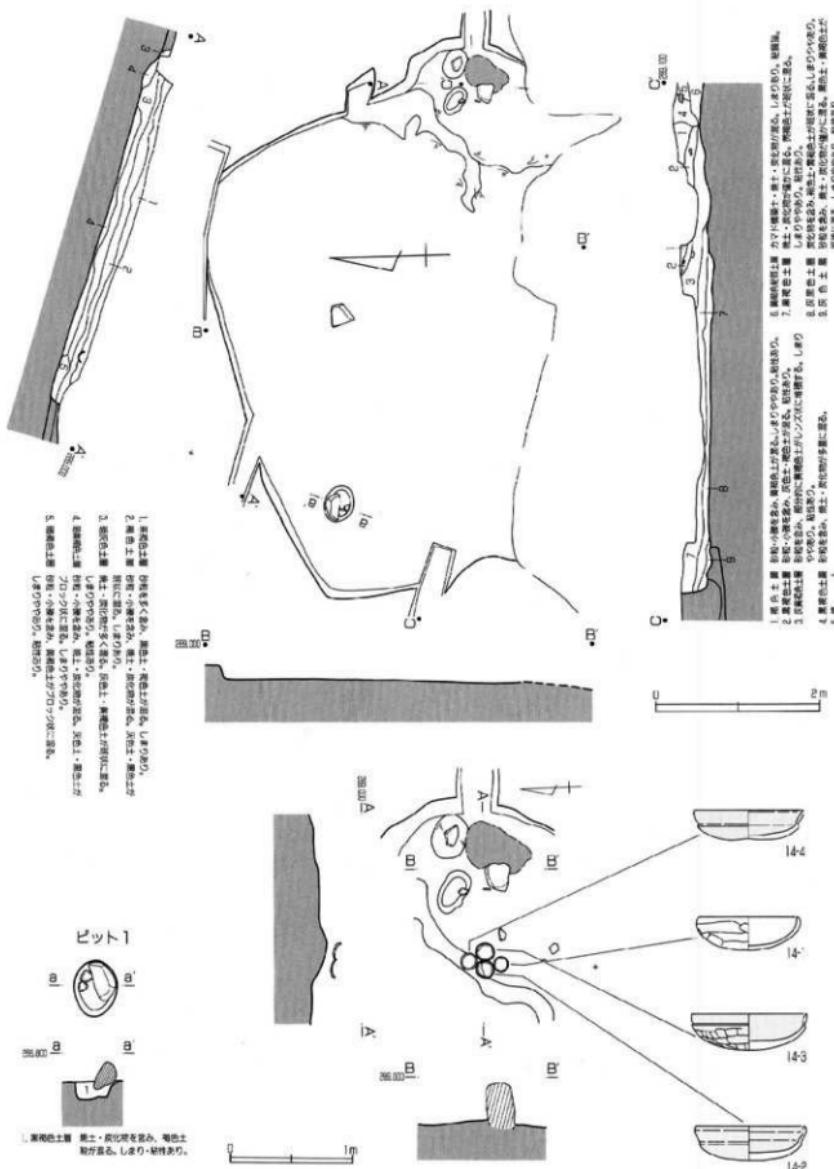


図 13 2号住居址、カマド、ピット平・断面図

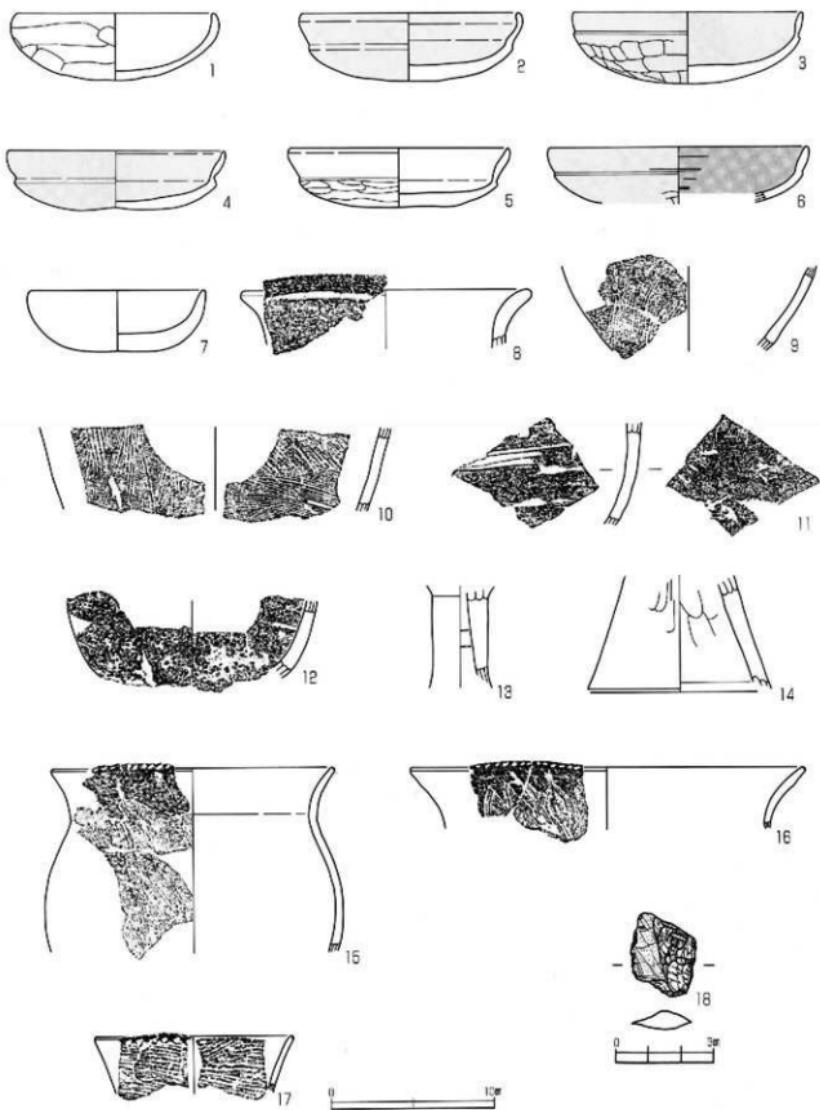


図 14 2号住出土遺物

3号住居址（図15、図版2）

遺構確認に際し遺物の集中とカマド袖石を確認した。遺構の大半は、トレンチ・搅乱により削平を受けたらしく確認できなかった。2・4号住居址と重複する。古墳時代後期の住居址である。

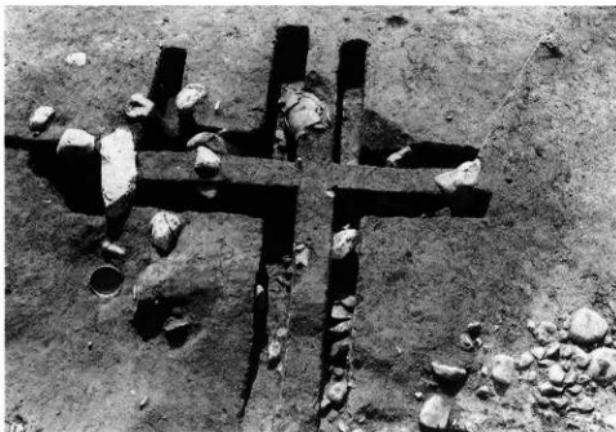
（位置）調査区中央、B・C-3・4グリッドで確認する。

（規模・形状）東西4.30m程度と推量される。

（遺物出土状況）カマドのみの確認であるため結果的に出土遺物の全てがカマド内もしくは周辺からの出土となる。点数は僅かで、焚口部から器形が判明する壺・甕が出土する以外、カマド内からは破片資料が検出される状況であった。

（カマド）重複により規模・構造など判然としないが、左側袖石が二石、焚口部に一石残存していた。構築材・焼土の広がりなどから長軸86cm、短軸80cm程度の規模となろう。周辺に構築材と思われる礫が散在していた。

（出土遺物）6点を図化した。内外面赤彩される壺（1～3）、ヘラ削りにより仕上げられた甕（5）などが出土する。



3号住カマド調査状況

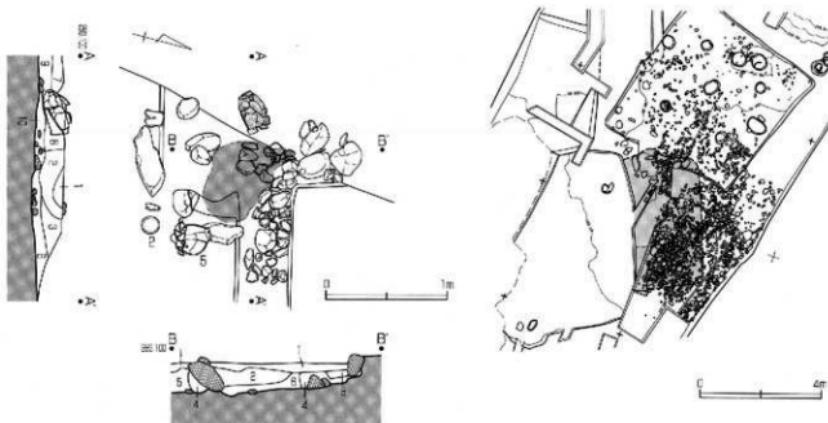
4号住居址（図16～19、図版2・3）

精査掘り下げに際し大量の遺物集中と黒色土の広がりを検出した。遺物の出土地点を記録しつつ平面プランを確認するとともに、トレンチ調査により遺構範囲を確認した。3号住居址と重複する。古墳時代後期に位置づけられる住居址である。

（位置）調査区西側、B・C-2・3グリッドで確認する。

（規模・形状）南北4.80m、北辺4.68m、南辺5.36mを測り、やや不整な方形を呈する。

（覆土）8層に分層でき、北側から埋没した過程が判明する。北側に焼土・炭化物が多く混入していた。



1. 反色土層 砂質・小礫を含み、変化地が僅かに混る。褐色土・青色土のが混在。褐色土のが混在。しまりあり。
 2. 黒褐色土層 褐土・泥炭が多量に混る。しまりあり。褐色土・泥炭が多量に混る。しまりあり。
 3. 褐色土層 砂質・小礫を含み、褐色土が混在。褐色土・泥炭を含む。褐色土が混在。しまりあり。
 4. 青褐色土層 砂質・小礫を含み、褐色土が混在。褐色土・泥炭を含む。褐色土が混在。しまりあり。
5. 宮褐色土層 砂質・小礫を含み、褐色土・青色土・褐色土が混在。褐色土が混在。しまりあり。
 6. 黒褐色土層 砂質・小礫を含み、褐色土が混在。褐色土が混在。しまりあり。
 7. 黑色土層 砂質・小礫を含み、褐色土が混在。褐色土が混在。しまりあり。褐色土が混在。しまりあり。
 8. 黒褐色土層 砂質・小礫を含み、褐色土が混在。褐色土が混在。しまりあり。
9. 宮褐色土層 砂質・小礫を含み、褐色土が混在。褐色土が混在。しまりあり。
10. 青褐色土層 砂質・小礫を含み、褐色土が混在。褐色土が混在。しまりあり。

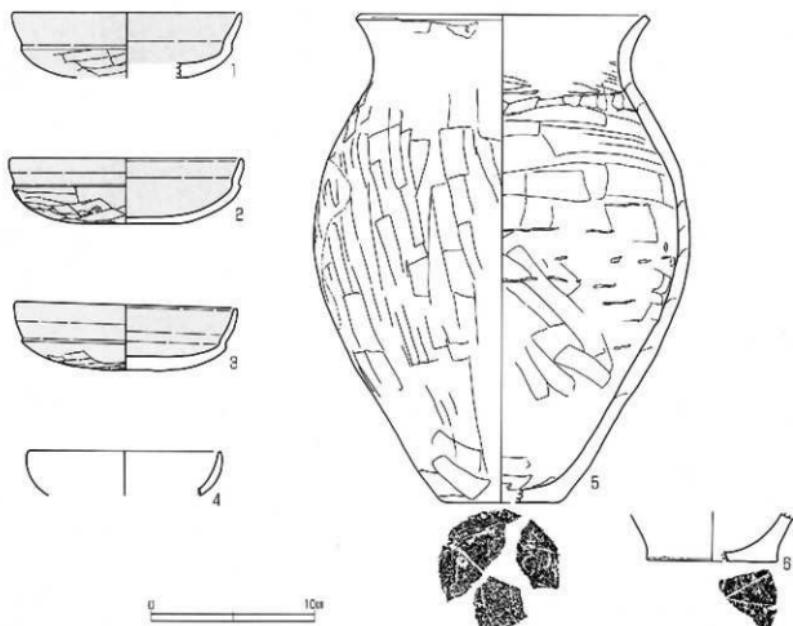


図 15 3号住居址平・断面図及び出土遺物

(遺物出土状況) カマド内及びその周辺から完形品が多量に集中して検出され、入れ子状となった甕・瓶、重なった状態の壊など一括性の高い資料となる。それ以外、住居址全体からも出土したが、多くは破片資料である。

(カマド) 北壁中央に造り付けられている。火床部を確認したのみで煙道部は検出できなかった。袖石は左右一石のみ残存し、他の構築材は確認されなかった。長軸1.01m、短軸0.39mの規模となり、床面からの深さ0.14mを測る。中央に焼上が5cm程堆積していた。

(内部施設) 北側床面が高くなるらしく10cm程度の比高差がある。ピットは8箇所を確認した。いずれも平面略円形を呈し、ピット1・4・6・7が柱穴となろう。ピット1は径 0.38×0.35 m、深さ0.25mを測り、ピット2は径0.48m、深さ0.25m、ピット3は径0.35×0.32m、深さ0.12mを測る。ピット4は径 0.38×0.33 m、深さ0.25mの規模となる。住居中央から検出したピット5は長軸0.56m、短軸0.43m、一部のみ深く0.54mを測る。ピット6は径 0.42×0.36 m、深さ0.43m、ピット7は径 0.40×0.35 m、深さ0.10mを測る。南壁に接し検出したピット8は径 0.42×0.40 m、深さ0.11mを測る。

(出土遺物) カマド周辺、床面直上からの出土である。壺は身も深く、大形な塊形を呈するもの(図18-1)、内湾口縁壺と呼ばれる丸底で口縁部との境に稜を有するもの(図18-2~10・16・17)、半球形を呈するもの(図18-11・12)、須恵器壺身を模倣し口縁部が強く内折するもの(図18-13~15)など4類型が認められた。赤彩あるいは黒色処理されるもの、内面に刻書があるものなども認められた。甕はいずれも内外面ハケ整形され、胴部が張る小形なものと長胴形を呈するものがある。図18-21~23は他時期の混入品であろう。他に手捏土器(図18-20)、砥石(図19-6)がある。



4号住跡調査風景



4号住跡発掘状況



遺物出土状況(1)



遺物出土状況(2)

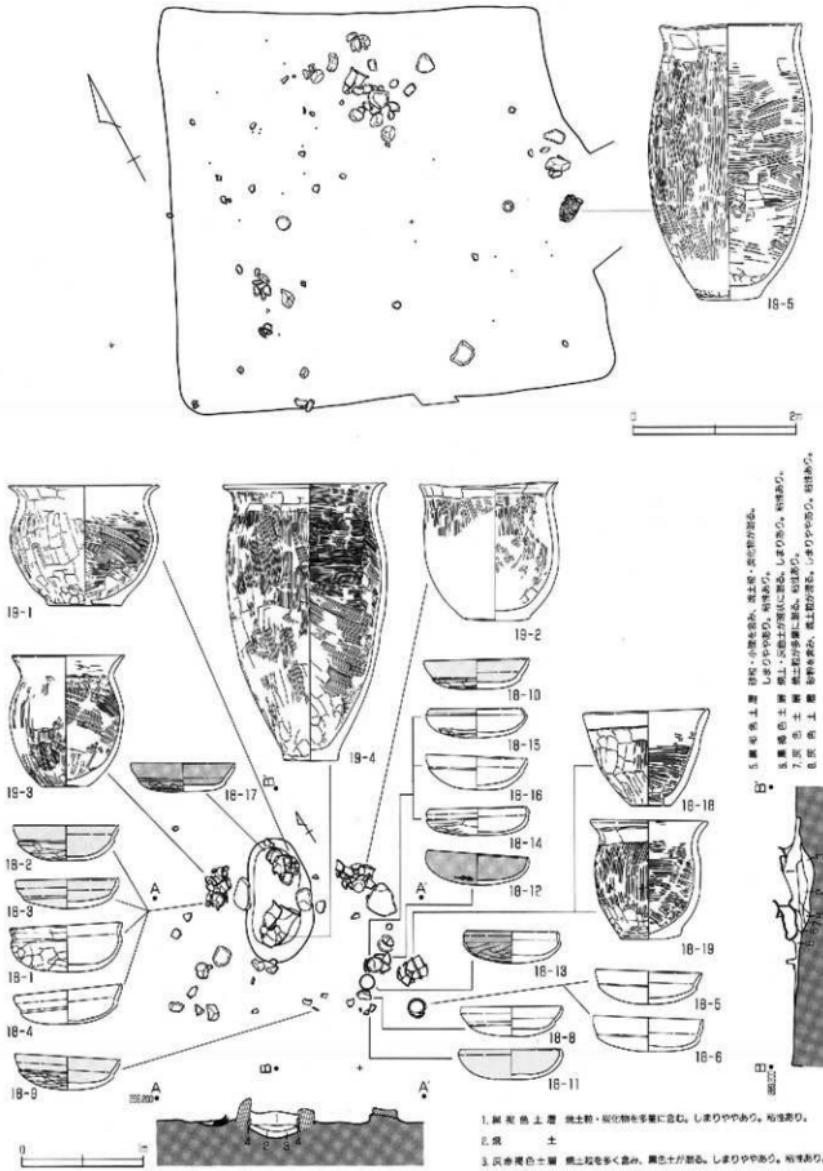


図 16 4号住居址、カマド遺物出土状況

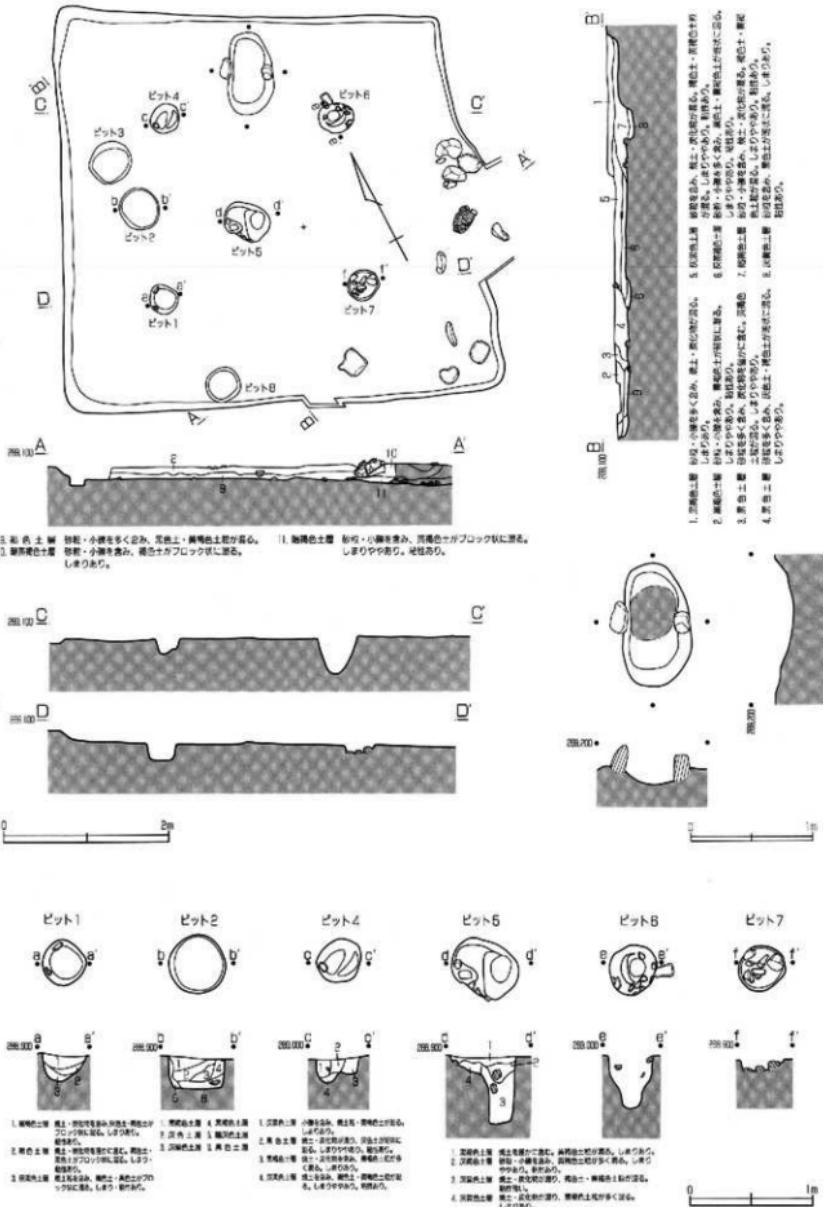


図17 4号住居址、カマド、ピット平・断面図

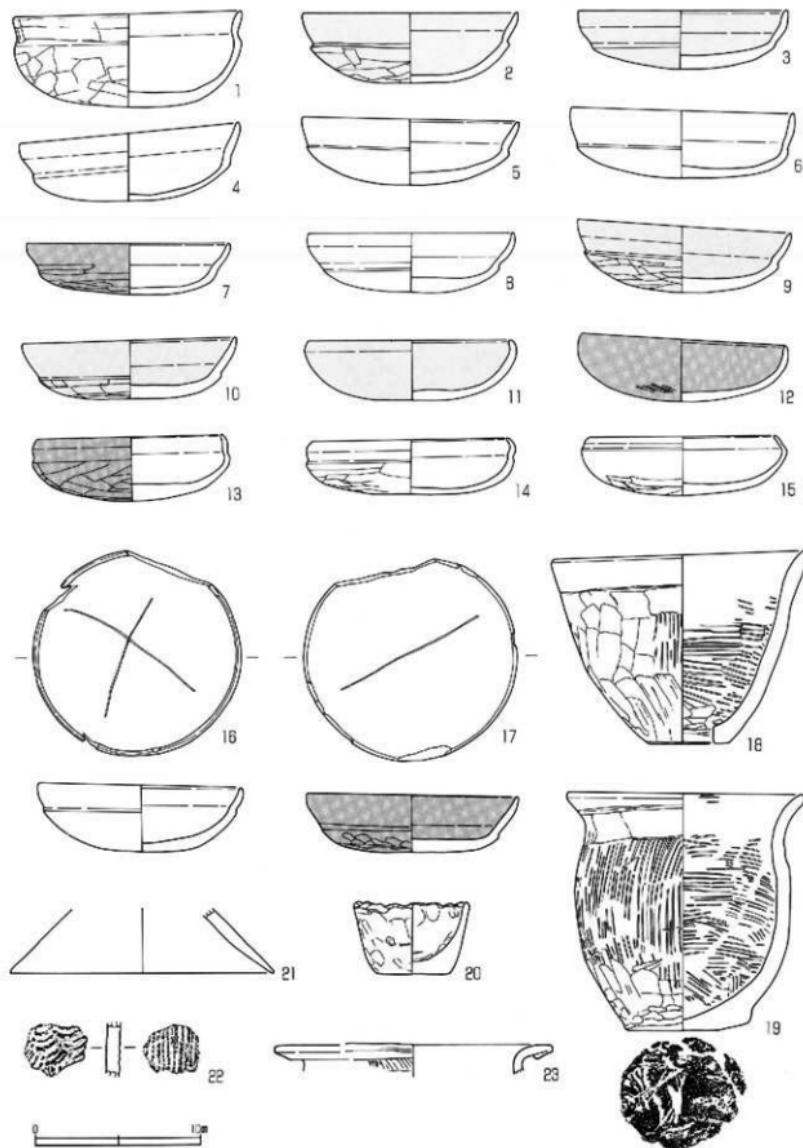


図18 4号住出土遺物(1)

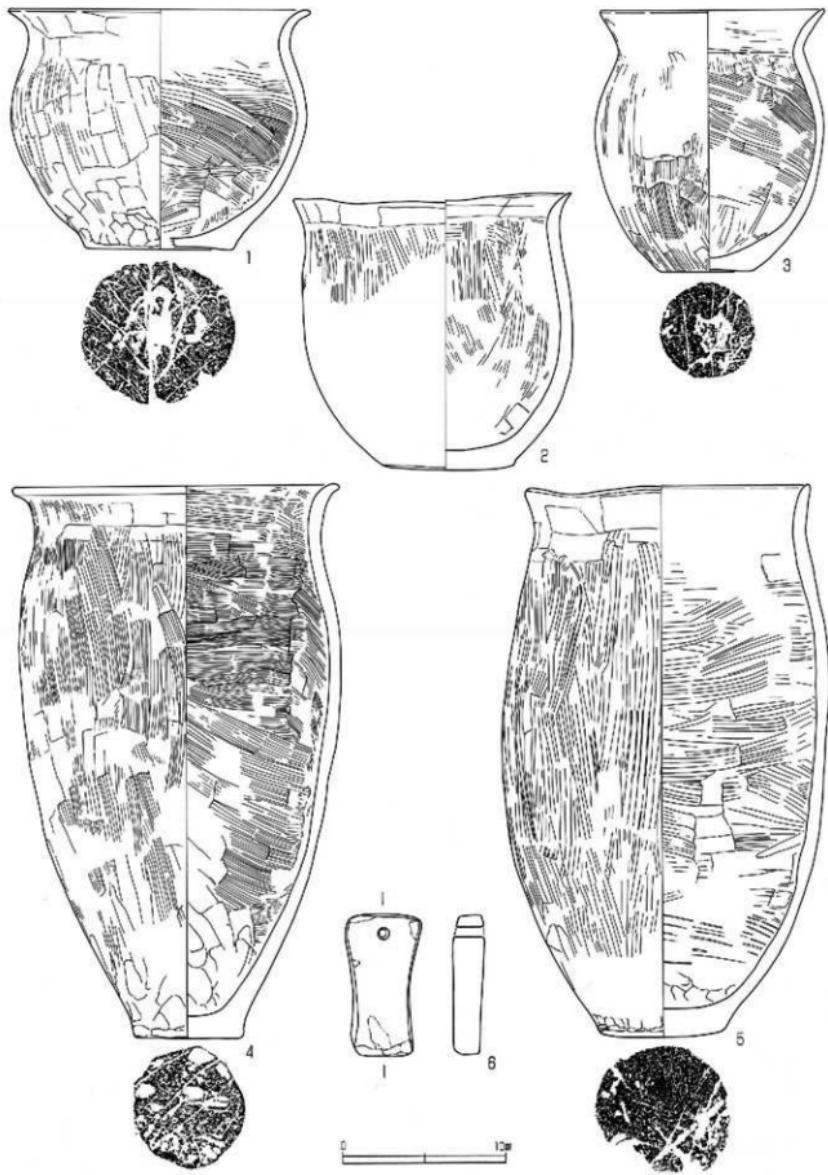


图19 4号住出土遗物(2)

5号住居址(図20、図版3)

精査掘り下げに際し黒色土の広がりを検出し、トレンチを設定して造構範囲及び掘り込みを確認した。北壁の一部を確認できたにすぎず、造構の大半は調査区外に広がり、かつ7号住と重複するため検出した範囲は僅かである。古墳時代後期の住居址である。

(位置) 調査区東側、D・E-7グリッドで確認する。

(規模・形状) 南北4m、東西1.5m程を検出し、方形を呈するか。

(遺物出土状況) 掘り下げに際し出土した点数は僅かで、単独かつ散在して検出される状況であった。

(内部施設) カマド・ピットなどは確認できていない。

(出土遺物) 4点を図化した(図20-1~4)。1・2は、古墳時代初頭の壺・甕の口縁部片、3・4は壺頸部と底部片である。



5・7号住発掘状況



6号住遺物出土状況

6号住居址(図21・22、図版3・4)

精査に際し黒色土の広がりを検出し、トレンチ調査により造構範囲及び掘り込みを確認した。造構の大半は調査区外に広がり、一部搅乱を受けている。カマド・ピットなど内部施設は確認できなかった。古墳時代後期の住居址である。

(位置) 調査区西側、C・D-2・3グリッドで確認する。

(規模・形状) 北辺4.08m、東西3.62mを測り、方形を呈するか。

(覆土) 搅乱により平面プランは判然としなかったが、東壁際が複雑な堆積状況となり、ピットなどの存在が推量される。全体的に黒褐色土が堆積し、上層に焼土・炭化物が多く混入していた。

(遺物出土状況) 掘り下げに際し、破片資料が散在して検出される状況であった。床面直上より出土する遺物は僅かであった。

(出土遺物) 壺・甕・壺・甕・瓶・紡錘車などがある。他に混入品と思われる古墳時代初頭の器台・壺破片、黒曜石で使用痕のある刺片がある。甕はハケ、壺はナデにより器面整形されている。

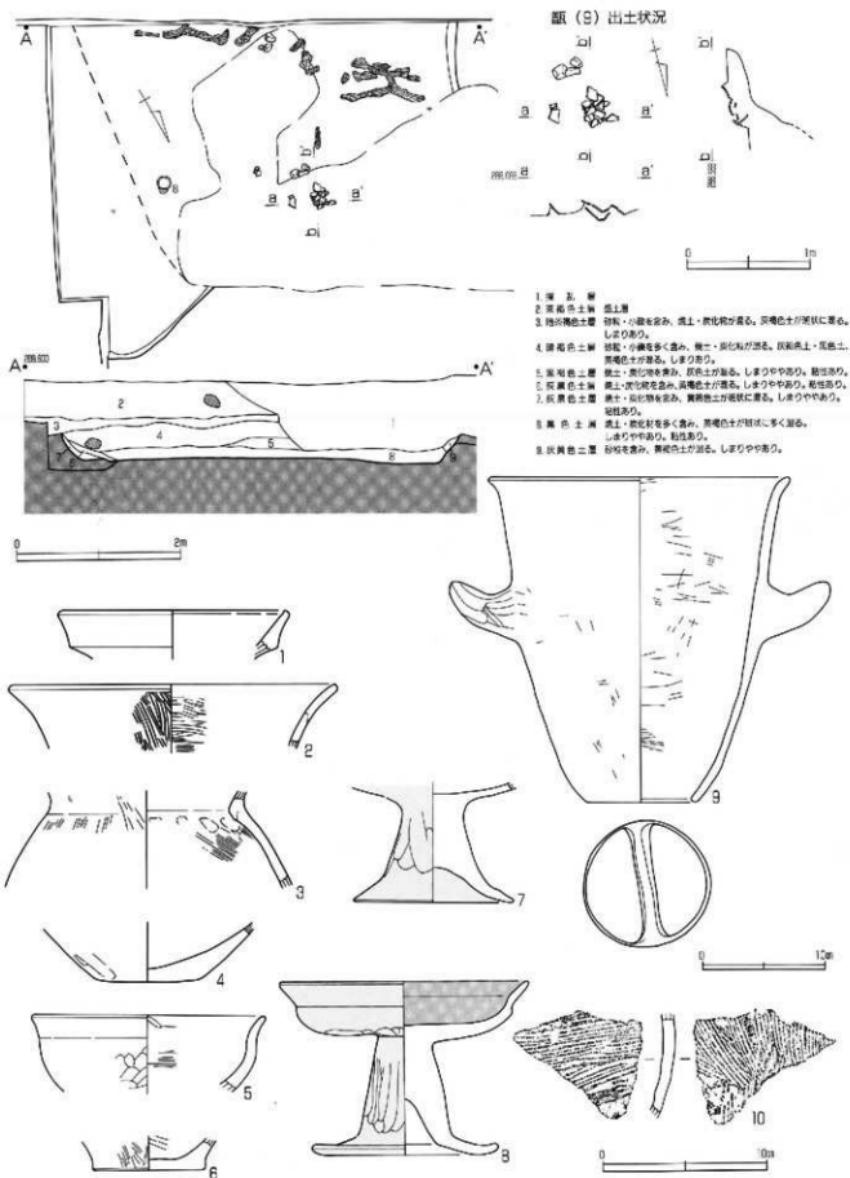


図 20 5・7号住居址平・断面図及び出土遺物

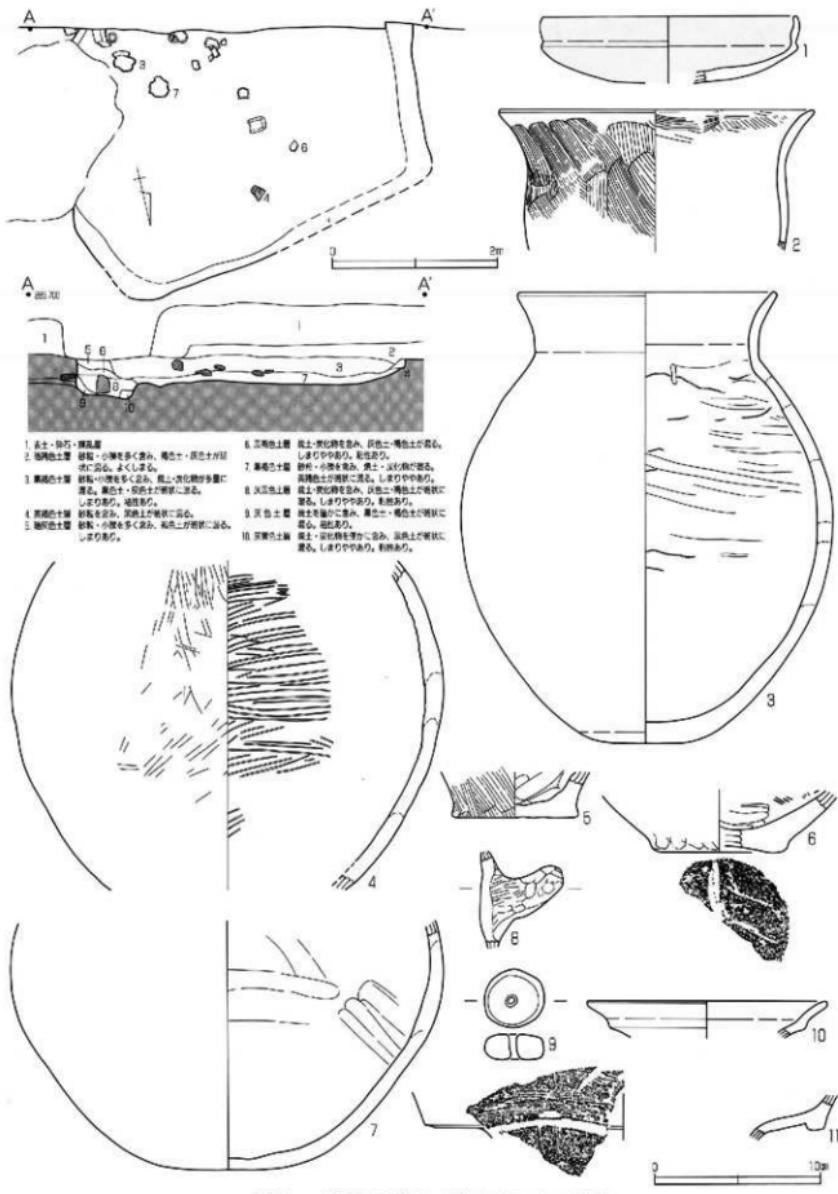


図21 6号住居址平・断面図及び出土遺物

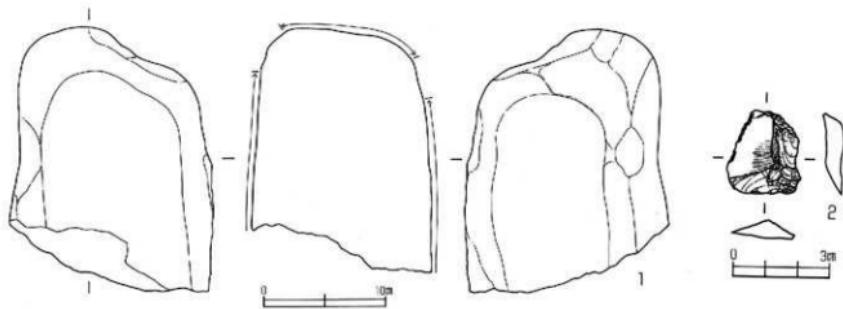


図22 6号住出土石器

7号住居址（図20、図版3）

遺物の集中と黒色土の広がりを検出し、トレンチを設定して遺構範囲及び掘り込みを確認した。遺構の大半は調査区外に広がり、カマドなど内部施設は確認できなかった。住居址中央から北半は大きく搅乱を受けている。古墳時代後期の住居址である。

（位置）調査区西側、E-6グリッドで確認する。

（規模・形状）東西4.54mの規模となり、南北2.40m程が残存する。

（覆土）壁際に灰黄色土が流入する以外、黒色土の水平堆積が見られた。下層に焼土・炭化材が堆積していた。

（遺物出土状況）掘り下げに際し覆土中より出土した点数は僅かで、散在して検出される状況であった。

（出土遺物）6点を図化した（図20-5～10）。やや身が深い壺（5）、内外面ハケにより器面整形される甕（6・10）、赤彩された高壺（7・8）がある。9の甕は搅乱範囲からの出土であるが、ここに掲載した。



7号住炭化材検出状況

第2節 溝状遺構（図23・24、図版4）

調査区東側、B・C-6グリッドに位置し、南北方向にやや湾曲して長さ6.92mにわたり検出された。南端は攪乱のため定かではない。幅1.34~2.18m、深さ0.26~0.40mの規模を有し、黒褐色土中に礫が多量に混入していた。混入礫は、溝跡中央に集中し、底から若干浮いた状態で出土する。出土遺物は図23に石器を、図24-1~9に土器を図化した。使用痕のある石器が2点出土したほか、土器の出土も少なく、多くは破片資料である。1は弥生時代後期の壺片であろう、櫛描波状文とともに沈線が一条認められる。2は棒状の貼付文が付く壺の口縁部である。弥生時代後期~古墳時代初頭に位置づけられよう。3以降は古墳時代後期に属す高环・环・甕・壺である。8・9の壺以外、多くの遺物が散在して出土した。

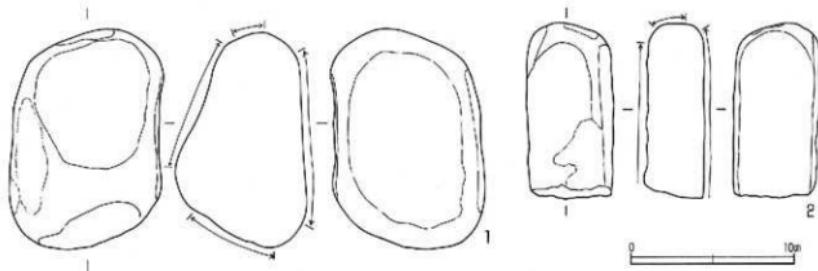
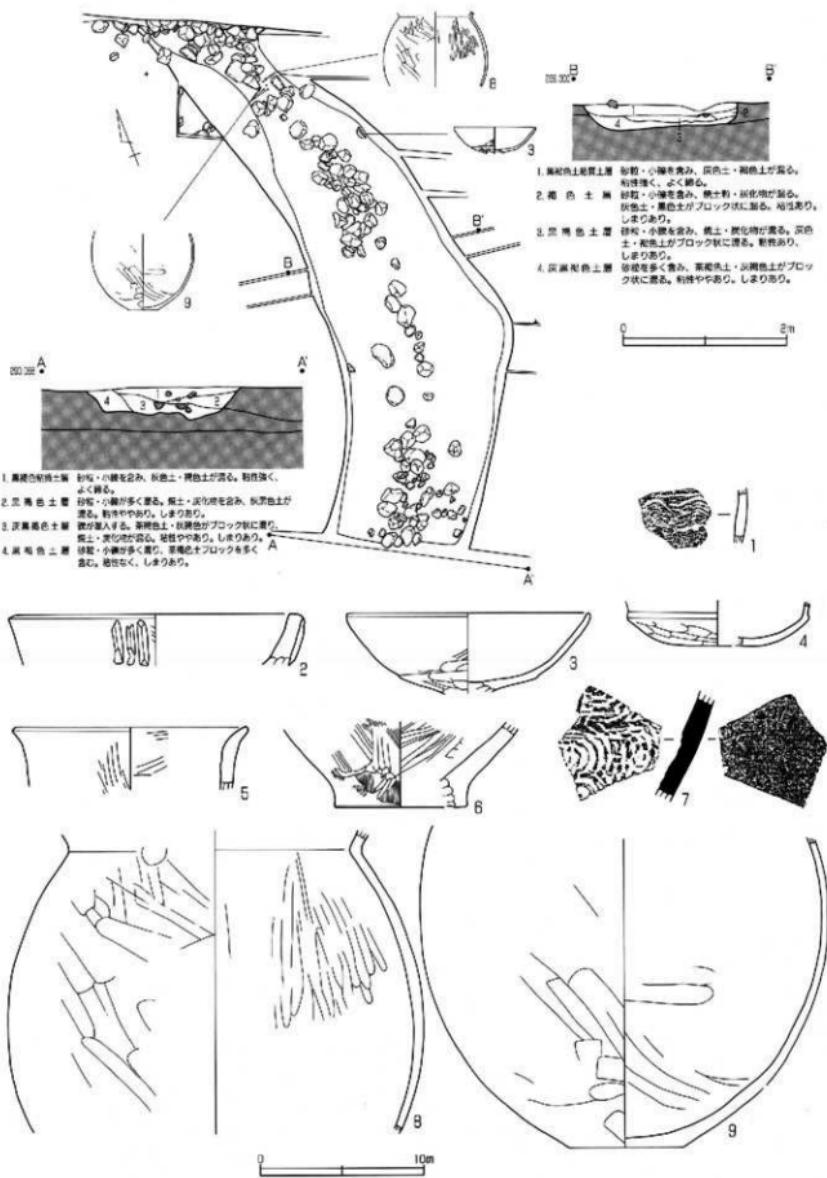


図23 溝状遺構出土石器



礫検出状況



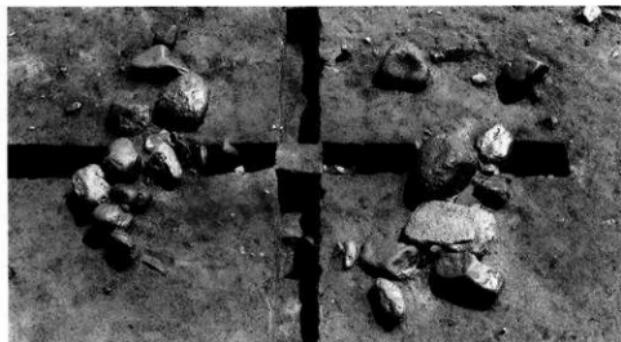
第3節 集石遺構（図25、図版4）

1号集石

調査区中央、C-5グリッドに位置し、掘り込みをともない南北方向に長軸をとる。下層に2号住居址が存在する。南端は搅乱のため定かでないが、長さ1.59m、幅0.98~1.24m、深さ0.31mの規模を有する。掘り込みの中央に大形の礫が並び、隙間に小礫が詰められている状況である。検出された礫は、底から若干浮いた状態で検出され、礫底はほぼ同一レベルとなる。出土遺物も少なく、多くが破片資料となるが、6点を図化した（図25-1~6）。1は弥生時代後期の壺片であろう、櫛描波状文が施文される。2以降は古墳時代後期に属す壙と甕である。6の磨石は搅乱範囲からの出土であるが、ここに掲載した。

2号集石

C-5グリッドに位置し、1号集石と近接して構築されている。1号同様、掘り込みをともない南北方向に長軸をとつて検出された。南端は搅乱を受けている。長さ1.94m、幅0.62~0.80m、深さ0.25mを確認した。礫はすでに抜き取られている痕跡もあったが、掘り込み中央に大形礫が集中し、隙間から小礫が検出される。いずれの礫も底面から浮き、礫底が同一レベルとなる。出土遺物は4点を図化した（図25-7~10）。7は弥生時代後期の口縁部に刻目が施される甕であろう。8以降は古墳時代後期に属す壙と甕である。構築年代は1・2号集石とともに古墳時代後期以降と考えられる。



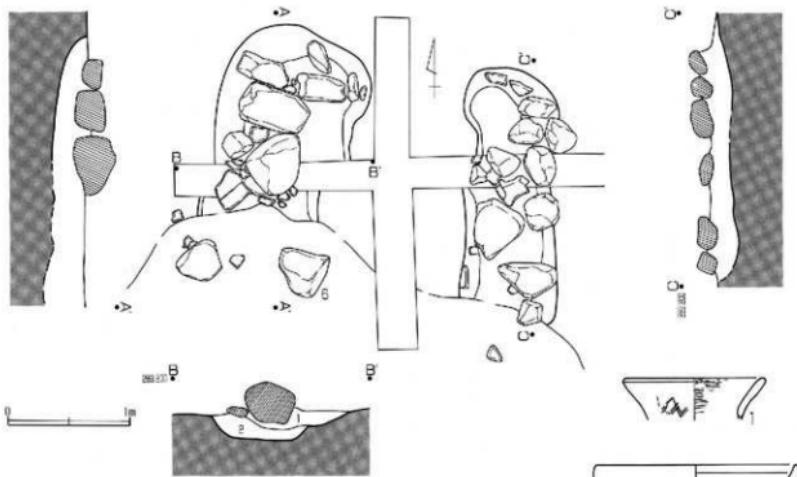
集石遺構確認状況
右～1号集石
左～2号集石



調査状況



完掘状況



1. 灰褐色土層 砂粒・小礫を含み、炭化物が混る。しまりややあり。
2. 黄褐色土層 砂粒・褐色土を含み、灰土・炭化物が混る。しまりややあり。
範囲あり。

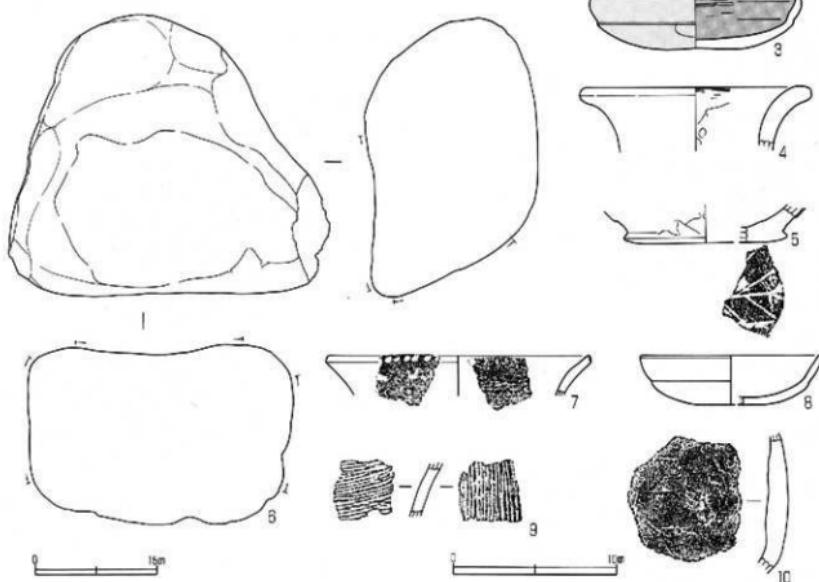


図 25 1 ~ 2 号集石平・断面図及び出土遺物

第4節 土坑（図26、図版4）

1号土坑

調査区西側、C-1グリッドに位置し、4号住居址に近接する。平面円形を呈し、南北0.74m、東西0.68m、深さ0.24mの規模を有し、一部底部が円形に7~8cm掘り窪められている。出土遺物は少なく、2点を図化した（図26-1・2）。いずれも古墳時代後期の甕である。

2号土坑

調査区西側、B-2グリッドに位置し、4号住居址に近接する。3号土坑と重複する。平面略円形を呈し、長軸0.54m、幅0.42m、深さ0.25mを測る。土層堆積から他の土坑と重複するか。出土遺物は少なく、2点を図化した（図26-3・4）。古墳時代後期の甕と环である。

3号土坑

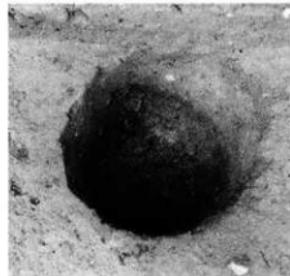
B-2グリッドに位置し、2号土坑と重複する。平面略円形を呈し、長軸0.47m、幅0.40m、深さ0.29mを測る。断面擂鉢状となる。出土遺物は細片のみであり、古墳時代後期の环が出土する（図26-5）。

4号土坑

調査区西端、C-1グリッドに位置する。平面円形を呈し、断面箱状となる。規模は長軸0.54m、幅0.47m、深さ0.35mを有する。出土遺物はない。



1号土坑



4号土坑



2・3号土坑

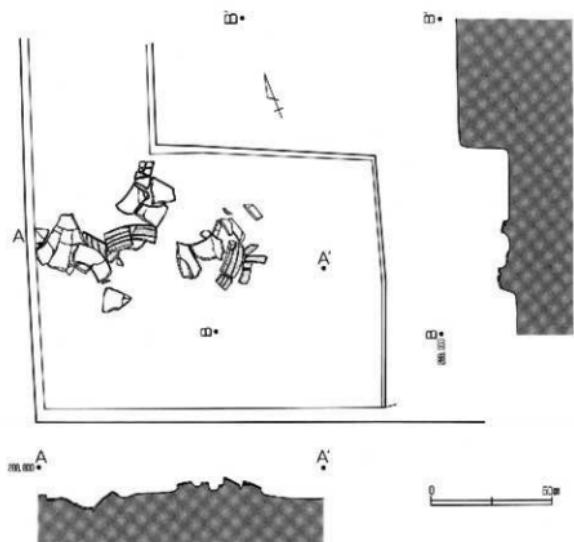
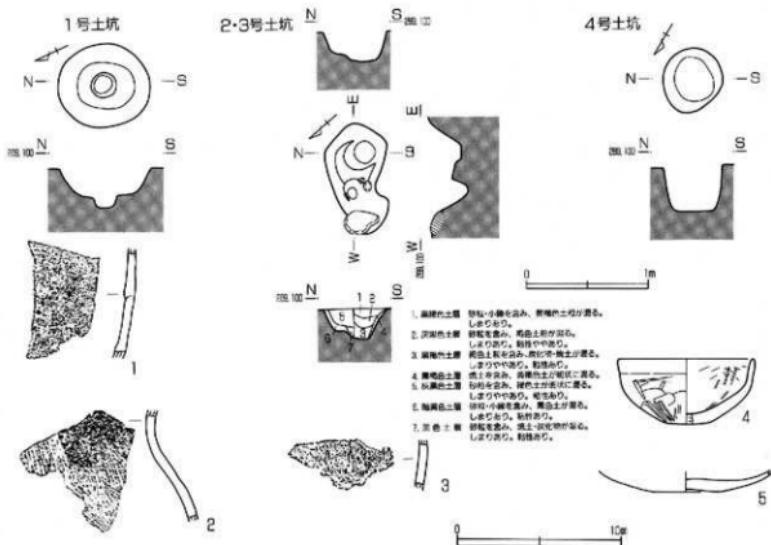


図26 1～4号土坑平・断面図及び出土遺物、一括出土遺物検出状況

第5節 遺構外出土遺物（図26～29、図版4・5）

グリッドの掘り下げに際し出土したもので、遺構に伴わないものを取り上げる。図27-1は調査区西端、C-1グリッドで集中して検出された。試掘調査に際しすでに確認していたが、掘り込みもなく、遺構にも伴わなかった（図26）。縄文前期諸磧式の深鉢である。胴下半が膨らみ、口縁部にかけて外反している。地文に縄文を充填した後、平行沈線が数段巡る。胴下半と口縁部に弧状あるいは藤手状の平行線が施される。2は波長の細かい櫛描波状文が施され、3は口縁部内側に細縄文を施し、折り返し部に指頭痕が残る。いずれも弥生時代後半の壺であろう。4～8は古墳時代後期の环となる。4は身が深く、口縁部が強く内傾し、5は須恵器环身を模倣したもの、6・7は須恵器环蓋を模倣した形態である。8は口縁部に沈線状の凹線が巡り、环に分類したが、身が深く塊形態となる。他に塊（9）、甕（10・11）、壺、瓶（13）がある。14の須恵器平瓶は、扁平化した胴部に短く筒状を呈した口縁部が付く。口縁部に二条の平行沈線が巡り、先端は丸口縁となる。15の須恵器フラスコ瓶は体部外面に同心円状の搔目が残り、沈線状の凹線が三条巡る。肩部にボタン状の貼付文が五個付く。16の鉄鎌は、正三角形式鎌となる。

図28-1～18は調査区一括遺物を取り上げた。1は縄文時代後期堀之内式期の深鉢であろうか、垂下する二条の沈線と縄文の施文がみられる。2～4は折り返し口縁となる壺破片、5・6は櫛描波状文が施される甕であろうか、いずれも弥生時代後期の所産である。7は棒状浮文が六個貼付された古墳時代初頭の壺口縁部片である。8～16は古墳時代後期の所産であろう。土師器环・塊・甕があり、13はカマドの土製支脚と思われる。ナデ・指頭により器面整形される。15の須恵器壺は、口径が小さく長頸壺などの口縁であろうか。17は内面に暗文が施される环蓋、18は灰釉陶器の皿底部片である。断面三日月状の高台が付き、10世紀前半に位置づけられる。

図28-19～28、図29-1～10は掠乱坑出土遺物を取り上げた。19は内面に細縄文を施す折り返し口縁の壺破片、20は櫛描波状文を施す甕、いずれも弥生時代後期の所産である。21は古墳時代初頭の二重口縁壺の口縁部であろうか。22以降が、古墳時代後期の所産となる。22～28は环を纏めた。22は大形となり、口縁部が直立する須恵器环蓋を模倣した形態である。23～27の内湾口縁环に口径が大きく底部の扁平化が進行したものがいる（24・26）。図29-1は壺となるか、胴部下半に最大径があり球胴形となる。2・3は甕、4・5は瓶である。6の高环は赤彩され、7はナデ・指頭により器面整形されたカマドの土製支脚である。8の須恵器环は口縁部に受け部を持つ形態であり、受け部が長く立ち上がる。9の須恵器口頭部は、口径が小さく長頸壺などの口縁であろう。10は大形甕の口縁部片である。外面に平行叩目文が認められる。

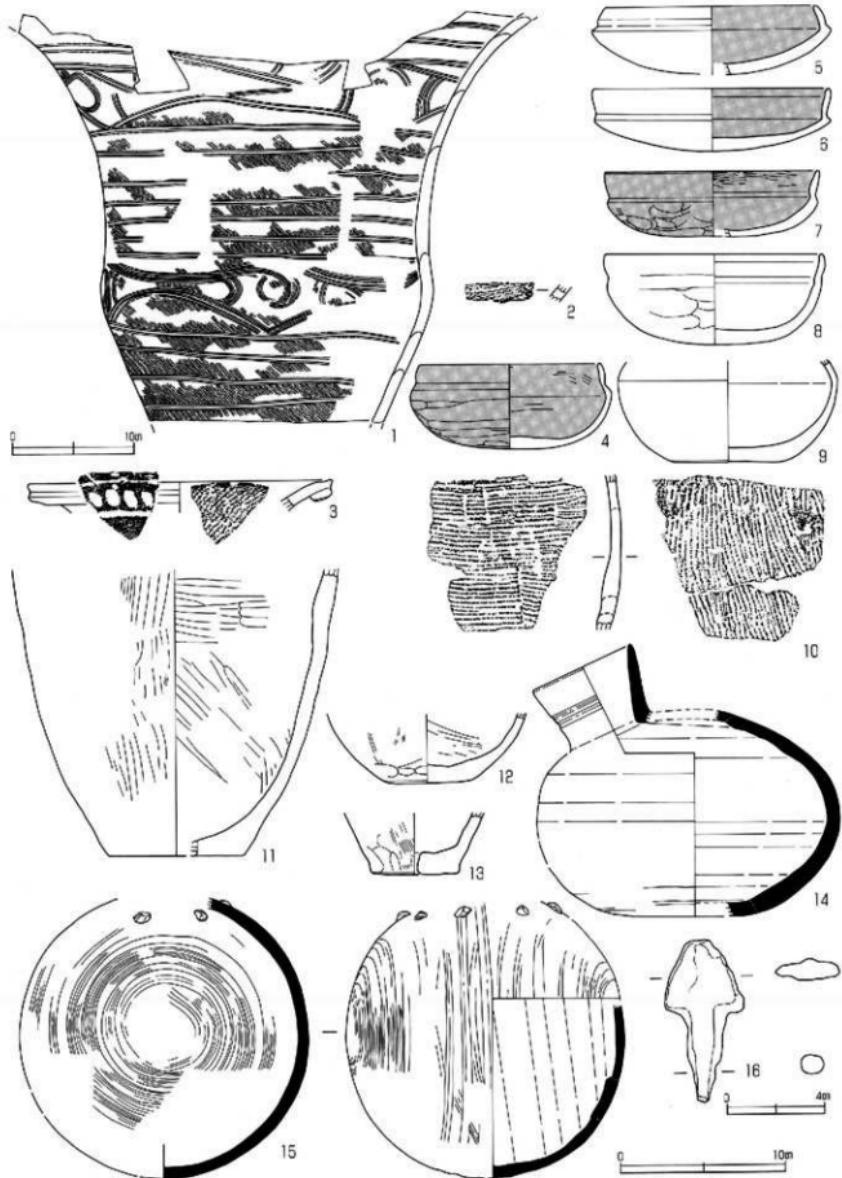
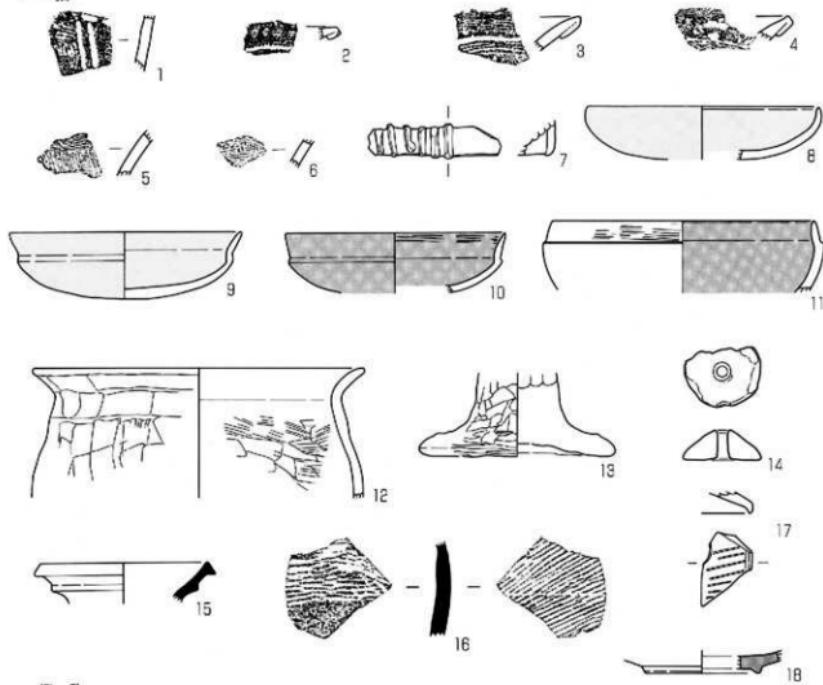


図27 グリッド出土遺物

一括



攏亂

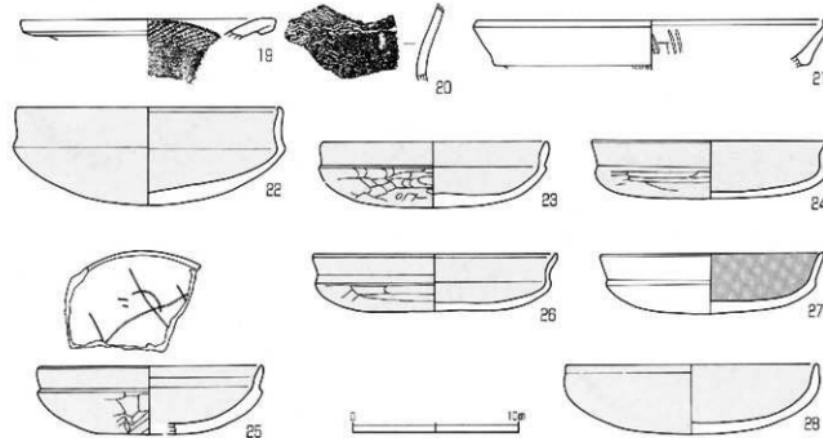


図28 調査区出土遺物(1)

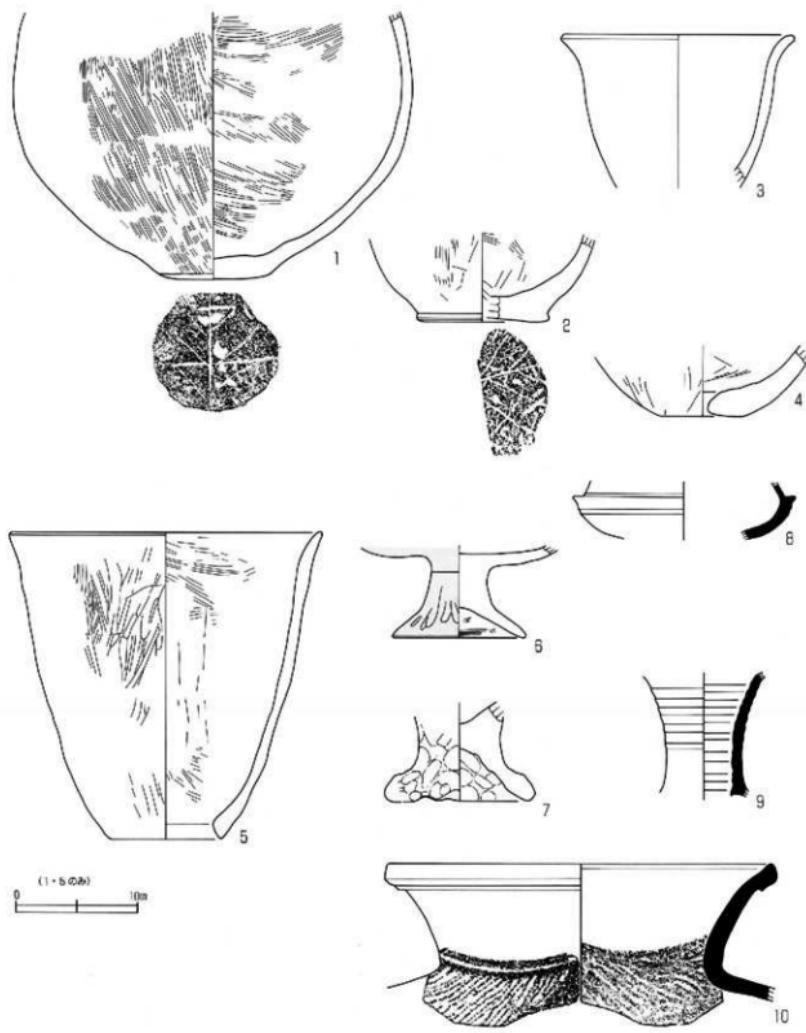


図29 調査区出土遺物（2）

出土遺物観察表(1)

図No	出土位置	種類・器形	法 貨 (cm)			部 位	観察所見(調整・文様・その他の)	胎上	備考
			口径	底径	高さ				
10.1	武振一括	土師器 环	12.8	3.1	口縁~底部	摩耗のため不鮮明	やや密		
10.2	武振一括	土師器 环	14.0	4.0	口縁~底部	外面赤彩、内面黒色	やや密		
10.3	武振一括	土師器 环	(13.3)	3.5	口縁~底部	外外面赤彩、削り後ミガキ	やや密		
10.4	武振一括	土師器 裏	17.8		口縁~側部	外外面赤彩、外面一部黒変、内面黒変	やや密		
10.5	武振一括	土師器 瓢	15.1		口縁~腹部	外外面口縁部分ナデ、側部ハケ、外腹側部ハケ後ナデ	やや密		
10.6	武振一括	土師器 高环		8.5	脚部	外面赤彩、ナデミガキ、脚部ハケ後ナデ	やや密		
10.7	武振一括	土師器 瓢	(23.1)		口縁~側部	外面ハケ・ナデ、内面ミガキ	やや密		
10.8	武振一括	土師器 瓢			脚部	外面白然釉、内面クロナデ	密		
10.9	武振一括	土製品 上透	孔 (0.6)	2.1	4.5			やや密	完形
10.10	武振一括	周文土 瓢			口縁部	平行沈線、諸彫り式	やや粗		
10.11	武振一括	周文土 瓢			側部	單筋L字、諸彫り式	やや粗		
12.1	1号住	土師器 环	(13.7)		口縁~体部	外外面ナデ、内面黒色	やや密		
12.2	1号住	土師器 裏			側部	外外面ハケ	やや密		
12.3	1号住	土師器 瓢		6.7	底部	外腹ハケ	やや粗		
12.4	1号住 ピット2	土師器 瓢	(17.5)		口縁部	外外面ナデ	やや密		
12.5	1号住 ピット2	土師器 瓢			脚部	外外面ハケ	やや密		
12.6	1号住 ピット2	土師器 瓢	(16.8)		体部	外外面ナデ、外腹削り	やや密		
14.1	2号住	土師器 环	12.0	4.1	外腹削り、内面ナデ	密	完形		
14.2	2号住	土師器 环	13.0	4.2	外外面ナデ後ミガキ、赤彩	密	略光形		
14.3	2号住	土師器 环	14.0	4.4	外外面口縁部ナデ後ミガキ、体部削り後ミガキ、内面ナデ後ミガキ、内外面赤彩	密	完形		
14.4	2号住	土師器 环	13.2	3.7	外外面赤彩一部残存、内外面ナデ	密	略完形		
14.5	2号住	土師器 环	13.4		外外面口縁部ナデ後ミガキ、体部削り、内面ナデ	密	完形		
14.6	2号住	土師器 环	(15.6)		口縁~体部	外外面口縁部ナデ後ミガキ、体部削り後ミガキ、赤彩 内面ナデ、黒色處理	密		
14.7	2号住	土師器 环	(16.0)	3.8	口縁~底部	外外面ナデ、内面ナデ後ミガキ	密		
14.8	2号住	土師器 裏	(17.4)		口縁部	外外面ナデ	密		
14.9	2号住 ピット1	土師器 裏			脚部	外腹ハケ	密		
14.10	2号住	土師器 裏			側部	外外面ナデ	密		
14.11	2号住	土師器 裏			側部	外腹削り	密		
14.12	2号住	土師器 裏			側部	外外面ナデ	密		
14.13	2号住	土師器 高环			脚部	外腹ナデ	密		
14.14	2号住	土師器 高环			脚部	外腹削り、内腹ナデ	密		
14.15	2号住	土師器 壺	(17.0)		口縁~側部	外外面口縁部削り、口縁部ハケ後ナデ、脚部ハケ、内面口縁部ハケ後ナデ、脚部ナデ、先端後削	密		
14.16	2号住	土師器 裏	(24.0)		口縁部	外腹ハケ、口縁部削り、先端後削	密		
14.17	2号住	土師器 壺	(12.0)		口縁部	外外面ハケ、口縁部削り、先端中期	密		
14.18	2号住	石器(使用痕がある剥片)	長さ 2.56 幅 1.92 厚さ 0.66			重さ 2.6g、黒曜石			
15.1	3号住カマド	土師器 环	(14.0)		口縁~体部	外外面赤彩、外外面口縁部ナデ、体部へラ削り、内面ナデ	やや密	完形	
15.2	3号住カマド	土師器 环	(14.0)		外外面赤彩、外外面口縁部ナデ、体部へラ削り	やや密			
15.3	3号住カマド	土师器 环	13.4	4.0	口縁~底部	外外面赤彩、外外面口縁部ナデ後ミガキ、体部へラ削り、内面ナデ	やや密		
15.4	3号住カマド	土师器 环	(11.7)		口縁~体部	外外面ナデ	やや密		
15.5	3号住カマド	土师器 裏	(17.4)	30.0	口縁~底部	外腹ハケ、内腹ナデ削り、外腹スス付着、底部木本茎痕	やや密		
15.6	3号住	土师器 裏	(8.0)		足部	外腹ナデ、底部木本茎痕	やや密		
15.7	4号住	土师器 环	13.6	5.7	口縁~底部	外腹削り、内腹黒變	やや密		
15.8	4号住	土师器 环	12.7	4.2	口縁~底部	外腹削り、一部黒變、外腹ナデ削り、内腹ナデ	やや密		
15.9	4号住	土师器 环	12.5	3.5	口縁~底部	外外面赤彩、一部残存、外腹へラ削り後ナデ、内面ナデ	やや密		
15.10	4号住	土师器 环	13.2	4.1	口縁~底部	外外面口縁部ナデ体部へラ削り、内面ナデ	やや密		
15.11	4号住	土师器 环	13.0	4.0	口縁~底部	外腹口縁部ナデ内腹へラ削り、内面ナデ	やや密		
15.12	4号住	土师器 环	13.3	4.1	口縁~底部	外腹口縁部ナデ体部へラ削り、内面ナデ、スス付着	やや密		
15.13	4号住	土师器 环	(12.1)	3.1	口縁~底部	外腹黑色处理、口縁部ナデ体部へラ削り	やや密		
15.14	4号住	土师器 环	12.2	3.6	口縁~底部	内腹ミガキ	やや密		
15.15	4号住	土师器 环	12.8	4.0	口縁~底部	外外面赤彩、内面ナデ後ミガキ	やや密		
15.16	4号住	土师器 环	12.2	3.6	口縁~底部	外外面赤彩、内面ナデ削り、内面ナデ	やや密		
15.17	4号住	土师器 环	12.2	3.7	口縁~底部	外腹ハケ、削り後ミガキ、ミガキ	やや密		
15.18	4号住	土师器 环	11.7	3.3	口縁~底部	内腹ナデ、ミガキ、外腹黑色處理	やや密		
15.19	4号住	土师器 环	11.0	3.6	口縁~底部	外腹口縁部ナデ体部へラ削り、内面ナデ後ミガキ	やや密		
15.20	4号住	土师器 环	12.2	4.1	口縁~底部	内腹ナデ後ミガキ延び削りあり、一部黒變	やや密		
15.21	4号住	土师器 环	12.7	3.5	口縁~底部	外腹口縁部ナデ体部へラ削り、内面ナデ、内腹ナデ	やや密		

出土遺物觀察表（2）

登録番号	出土位置	種類・形態	法 量 (cm)			部位	觀察所見(調査・文様・その他)	胎土	備考
			11径	底径	厚さ				
1818	4号住	土師器 瓢	15.0	4.6	11.6	口縁～底部	外面ハケ残ナデ、ヘラ削り、内面ナデ、ハケ	やや粗	
1819	4号住	土師器 瓢	14.1	7.2	14.5	口縁～底部	外面ハケ、ナデ、ヘラ削り、内面ナデ、ハケ、底部木葉痕	やや粗	
1820	4号住	土師器 瓢	(6.7)	4.2	4.2	口縁～底部	内面ナデ、指痕	やや粗	
1821	4号住	土師器 高环	16.0			脚部	内面ナデ	やや粗	
1822	4号住	須恵器 麦か				体部	外兩面子口状タスキ、内面青海波文 彦元式焼成されず、器化している	やや粗	
1823	4号住	土師器 瓢				口縁部	外兩面口縁部ナデ、頸部ハ、内面ナデ、折り返し口縁	やや密	
191	4号住	土師器 瓢	(18.2)	9.0	14.7	口縁～底部	外兩面口縁部ナデ、体部ナデ、ハケ、底部木葉痕	やや粗	
192	4号住	土師器 瓢	16.8	8.0	16.8	口縁～底部	内面ハケ、外兩面口縁部ナデ、頸部ハケ 外側全体2面焼成を受ける摩耗、剝離する	やや粗	
193	4号住	土師器 瓢	13.6	6.0	5.7	口縁～底部	外側面部ハケ、内面口縁部ナデ、体部ハケ、底部木葉痕	やや粗	
194	4号住	土師器 瓢	19.5	6.5	34.0	口縁～底部	外側面部ハケ、底部木葉痕	やや粗	
195	4号住	土師器 瓢	17.0	7.5	33.8	口縁～底部	外側口縁部ナデ、体部ハケ内面口縁部ナデ、体部ハケ	やや粗	
196	4号住	石製品 砥石	長さ 8.6	幅 4.6	厚さ 1.9		幅4mmの穿孔あり、重さ121.9g		
201	5号住	土師器 瓢	(13.4)			口縁部	内外面ナデ、古墳初頭	密	
202	5号住	土師器 瓢	(19.6)			口縁部	内外面ハケ	密	
203	5号住	土師器 瓢				脚部	内外面ハケ後段ナデ	密	
204	5号住	土師器 瓢				底部	外面ナデ、内面ナデ	密	
205	7号住	土師器 环	(14.0)			口縁部	外面ナデ、前段、内面ナデ、ハケ	密	
206	7号住	土師器 瓢				底部	内外面ハケ、内面ナデ	密	
207	7号住	土師器 高环				脚部	脚部内外面赤系、剥り、ナデ、环部外赤系、内面ナデ	密	
208	7号住	土師器 高环	15.0	11.4	10.6	环部～脚部	外面赤系、ナデ、ミカゲ、剥り、内面黑色処理、ナデ後ミカゲ	密	略光沢
209	7号住	土師器 瓢	(24.4)	9.0	27.0	口縁～底部	外側面リハケ後ナデ、内面ハケ後ナデ	密	
2010	7号住	土師器 瓢				脚部	内面ハケ	密	
211	6号住	土師器 环	(14.6)			口縁～底部	内面ナデ、赤彩	密	
212	6号住	土師器 瓢	(19.0)			口縁部	内面ハケ後段口縁部ナデ	密	
213	6号住	土師器 瓢	(15.4)			口縁～底部	内面ナデ、内面ハケ後段ナデ	密	
214	6号住	土師器 瓢				脚部	内面ハケ、ナデ	密	
215	6号住	土師器 瓢	(7.8)			底部	外面ナデ、内面ナデ	密	
216	6号住	土師器 瓢	(8.0)			底部	外面ナデ、指痕、内面ハケ、ナデ、底部木葉痕	密	
217	6号住	土師器 瓢	8.0			底部	外面ナデ	密	
218	6号住	土師器 瓢				把手部	ハハ、折痕	密	
219	6号住	土製品 織籠車						密	光沢
220	6号住	土師器 瓢	(14.4)			口縁部	内外面ナデ、古墳初頭	密	
221	6号住	土師器 瓢				口縁部	外側面リハケ後ナデ、内面ハケ後ナデ	密	
222	6号住	石器 石磨	長さ 20.0	幅 16.7	厚さ 14.8		磨面が3面、重さ9.05kg、安山岩		
223	6号住	石器 (使用痕 がある側面)	長さ 2.54	幅 2.27	厚さ 0.73		重さ3.0g、磨歴石		
224	溝状造構	石器 岩石	長さ 13.1	幅 9.3	厚さ 7.9		磨面が4面、重さ1.5kg		
225	溝状造構	石器 岩石	長さ 10.8	幅 9.3	厚さ 3.7		磨面が3面、重さ420.8g		
226	溝状造構	土師器 瓢				体部	外面沈痕、擦痕波状文、弦纹時期	やや密	
227	溝状造構	土師器 瓢	(18.0)			口縁部	外側面ハケ、神社狀付文、口唇部単節波文 内面ナデ、發生後期	密	
228	溝状造構	土師器 高环	(14.8)			口縁～底部	外側口縁部横ナデ、擦痕	密	
229	溝状造構	土師器 环	(12.2)			口縁～底部	外側面内面ナデ、体部削り、内面ナデ	密	
230	溝状造構	土師器 瓢	(11.0)			口縁部	外側ハケ後段ナデ、内面ハケ	密	
231	溝状造構	土師器 瓢	(8.0)			底部	外側ハケ、ナデ、内面ナデ	密	
232	溝状造構	土師器 瓢				脚部	外面削り、内面ナデ	密	
233	溝状造構	土師器 瓢				底部	外側ハケ、内面ナデ	密	
234	溝状造構	土師器 瓢				把手部	外側面ハケ、内面ナデ	密	
235	1号集石	土師器 瓢	(8.6)			口縁部	外側面擦痕波状文、内面ハケ、芽生後期	密	
236	1号集石	土師器 环	(12.2)			口縁部	外側面波状文ナデ、体部削り、内面ナデ	密	
237	1号集石	土師器 瓢	(12.4)			口縁部	外側面赤系、口縁部ナデ、体部削り、内面黑色処理	密	
238	1号集石	土師器 瓢	(13.6)			口縁部	外側面ナデ、内面ハケ	密	
239	1号集石	土師器 瓢	(7.0)			底部	底部木葉痕	密	
240	1号集石	土師器 瓢						密	
241	1号集石	土師器 瓢						密	
242	2号集石	土師器 瓢	(16.0)			口縁部	内外面ナデ、口縁部削り	密	
243	2号集石	土師器 环	(11.0)			口縁～底部	内外面ナデ	密	
244	2号集石	土師器 瓢				脚部	内外面ナデ	密	
245	2号集石	土師器 瓢				底部	外側ハケ、内面ナデ	密	
246	2号集石	土師器 瓢				把手部	外側面ハケ、内面ナデ	密	
247	2号集石	土師器 瓢				底部	外側面ハケ、内面ナデ	密	
248	2号集石	土師器 瓢				把手部	外側面ハケ、内面ナデ	密	
249	2号集石	土師器 瓢				底部	外側面ハケ、内面ナデ	密	
250	1号集石	土師器 瓢						密	
251	1号集石	土師器 瓢						密	
252	1号集石	土師器 瓢						密	
253	1号集石	土師器 瓢						密	
254	1号集石	土師器 瓢						密	
255	1号集石	土師器 瓢						密	
256	1号集石	石器 磨石	長さ 34.4	幅 35.7	厚さ 21.8		磨面が3面、重さ37.0kg、安山岩		
257	2号集石	土師器 瓢				口縁部	内外面ナデ、口縁部削り	密	
258	2号集石	土師器 环				口縁～底部	内外面ナデ	密	
259	2号集石	土師器 瓢				脚部	内外面ナデ	密	
260	2号集石	土師器 瓢				底部	外側面ナデ	密	
261	1号上坑	土師器 瓢				把手部	外側面ナデ	密	
262	1号上坑	土師器 瓢				底部	外側面ハケ	密	
263	2号上坑	土師器 瓢				把手部	内面ナデ	密	
264	2号上坑	土師器 小环	(8.2)	4.0	(2.6)	口縁～底部	外側面ハケ、ヘラ削り後ミカギ、内面ハケ後ミカギ	密	
265	3号上坑	土師器 环		4.0		底部	外側面ナデ	密	

出土遺物観察表(3)

図No	出土位置	種類・器形	法 寸径	重 量(cm)	部 位	観察所見(調査・文様・その他)	粘土	備考
27.1	C-1 グリッド	縄文土器 深鉢			胴部	縄文b式	やや密	
27.2	C-2 グリッド	土師器 瓢			胴部	外面横模波状文、内面ナデ	密	
27.3	C-5 グリッド	土師器 瓢			口縁部	折り返し口縁、指痕軸あり、内面細縄文	密	
27.4	C-3 グリッド	土師器 壺	11.0	5.2		外面部口縁部ナデ後ミガキ、体部削り後ミガキ 内面ナデ後ミガキ、内外面黒色処理	密	完形
27.5	C-7 グリッド	土師器 环	(12.6)		口縁~底部	外面部口縁部ミガキ体部ナデ、内面ミガキ、黒色処理	やや密	
27.6	C-1 グリッド	土師器 环	14.6	3.8		外面部口縁部ナデ後ミガキ、体部削り、内面ナデ後ミガキ、黒色処理	密	略完形
27.7	C-2 グリッド	土師器 环	(13.0)			外面部口縁部ナデ、体部削り、内面ハケ・ナデ、内外面黒色処理	密	
27.8	C-2 グリッド	土師器 环	(13.2)	5.55	口縁~底部	外面部体部削り、内面ナデ	密	
27.9	B-1・C-1 グリッド	土師器 塚		(7.0)	体部	内外面ナデ	密	
27.10	C-1 グリッド	土師器 壺			胴部	内外面ハケ	密	
27.11	C-1 グリッド	土師器 壺		(8.2)	胴部~底部	外面部ハケ、二次焼成により外面部剥離、内面ナデ	密	
27.12	C-1 グリッド	土師器 壺		5.4	底部	外面部削り・ハケ、内面ハケ	密	
27.13	B-4 グリッド	土師器 壺		5.4	底部	外面部ハケ・ナデ、内面ナデ	密	
27.14	C-7 グリッド	須恵器 平瓶	(6.3)	7.3	(16.5) 口縁~底部	外面部ロクロナデ・ヘラ削り、腹部沈線2条、内面ナデ	やや密	
27.15	C-7 グリッド	須恵器 フラスコ瓶			胴部~底部	外面部同心円状のカキ目、絞線状の凹線3条 腹部ボタン状附片付5個	密	
27.16	C-7 グリッド	鉄製品 試鋳	長さ 6.5	幅 5.3	厚さ 9.0	正三角形式、重さ14.4g		
28.1	一括	縄文土器 深鉢			胴部	单脚L字縄文、沈線2条、船之内式	やや粗	
28.2	一括	土師器 壺			口縁部	折り返し口縁、口縁部削み、ハケ、昇生後期	やや密	
28.3	一括	土師器 壺			口縁部	折り返し口縁、外面部赤彩	やや密	
28.4	一括	土師器 壺			口縁部	折り返し口縁、内面部口縁部ナデ・ミガキ、外面部ハケ、昇生後期	やや密	
28.5	一括	土師器 壺			胴部	外面部横模波状文、ハケ、昇生後期	やや密	
28.6	一括	土師器 壺			底部	外面部横模波状文、昇生後期	やや密	
28.7	一括	土師器 壺			口縁部	外面部横模波状文付近、有段口縁、古墳初期	やや粗	
28.8	一括	土師器 壺	(14.0)		口縁~体部	内面ナデ、赤彩	やや密	
28.9	一括	土師器 壺	(14.0)	4.1	口縁~底部	口縁部ナデ、内面赤彩	やや密	
28.10	一括	土師器 壺	(14.3)		口縁~体部	外面部口縁部ナデ・ミガキ、体部削り、内面ハケ・ナデ、黒色処理	やや密	
28.11	一括	土師器 塚	(16.0)		口縁~体部	外面部ハケ、内面黒色	やや密	
28.12	一括	土師器 壺	(20.0)		口縁~底部	外面部ナデ、内面ハケ	やや密	
28.13	一括	土製品 カマド支脚		(11.3)	脚部	外面部ナデ、指痕痕	やや粗	
28.14	一括	土製品 鋤鋤車	孔 0.6	4.8	1.8	重さ23.6g	やや密	
28.15	一括	須恵器 金	(10.0)		口縁部	外面部ロクロナデ	密	
28.16	一括	須恵器 壺			胴部	外面部タタキ	密	
28.17	一括	土師器 壺			口縁部	内面放射状の暗紋	やや密	
28.18	一括	灰釉陶器 甌		(7.0)	底部	外面部ロクロナデ、付高台	密	
28.19	一括	土師器 甌	(15.4)		口縁部	折り返し口縁、外面部、内面単節L字縄文、昇生後期	密	
28.20	一括	土師器 壺	(21.0)		胴部	外面部横模波状文、ナデ、昇生後期	密	
28.21	一括	土師器 壺			口縁部	外面部ナデ・ナデ、内面ミガキ	密	
28.22	一括	土師器 壺	16.0	6.05		内面ナデ、赤彩	密	
28.23	一括	土師器 壺	13.6	4.15		外面部口縁部ナデ、体部削り、内面ナデ、内面赤彩	密	略完形
28.24	一括	土師器 壺	14.4	3.65	体部	外面部口縁部ナデ、体部削り、内面ナデ、内面赤彩	密	略完形
28.25	一括	土師器 壺	(13.4)	4.15	口縁~底部	外面部口縁部ナデ、体部削り、内面ナデ、内面赤彩	密	
28.26	一括	土師器 壺	14.6	3.6		外面部ナデ・削り、内面ナデ・ミガキ、内外面赤彩	密	略完形
28.27	一括	土師器 壺	13.5	3.95		外面部ナデ、外周黒帯、内面黒色	密	略完形
28.28	一括	土師器 壺	(15.2)	4.3		内面ナデ、赤彩	密	
29.1	複乱一括	土師器 壺		8.8	胴部~底部	内面ハケ	密	
29.2	複乱一括	土師器 壺		(8.0)	底部	外面部ハケ、底座木痕痕	密	
29.3	複乱一括	土師器 壺	(14.0)		口縁~胴部	内面ナデ	密	
29.4	複乱一括	土師器 壺	(5.0)		底部	外面部ハケ、内面ハケ後ナデ	密	
29.5	複乱一括	土師器 壺	(25.2)	(9.0)	25.2 口縁~底部	内面ハケ後ナデ	密	
29.6	複乱一括	土師器 高甌		8.0	脚部	外面部ナデ、赤彩	密	
29.7	複乱一括	土製品 カマド支脚		(8.6)		内面外指痕痕	密	
29.8	複乱一括	須恵器 壺			口縁~体部		密	
29.9	複乱一括	須恵器 壺			胴部		密	
29.10	複乱一括	須恵器 壺	(23.4)		口縁部		密	

第4章 まとめ

今回の調査で確認された遺構は、古墳時代後期の竪穴住居址7棟、集石遺構2基、溝状遺構1条、土坑3基である。出土遺物は、縄文時代の上器片・石器、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片、古墳時代後期の土師器・須恵器・土製品・金属器、平安時代の土師器・灰釉陶器などがある。遺構とともに多種多様な遺物を確認し、縄文時代から平安時代にかけ多岐にわたる複合遺跡となる。

遺構は検出できなかったが、縄文時代前期後半、諸磯b式期の一括資料が得られた。他にグリッド等から後期の堀之内式期に位置づけられる小片を検出している。調査区西辺からの出土であり、東側は出土数が極端に少なくなる傾向であった。過去の調査事例や遺跡分布及び微地形観察から該期の集落の中心が、調査地点より西にあることは明確であり、今回の調査でもそうした見通しを裏打ちする結果となった。

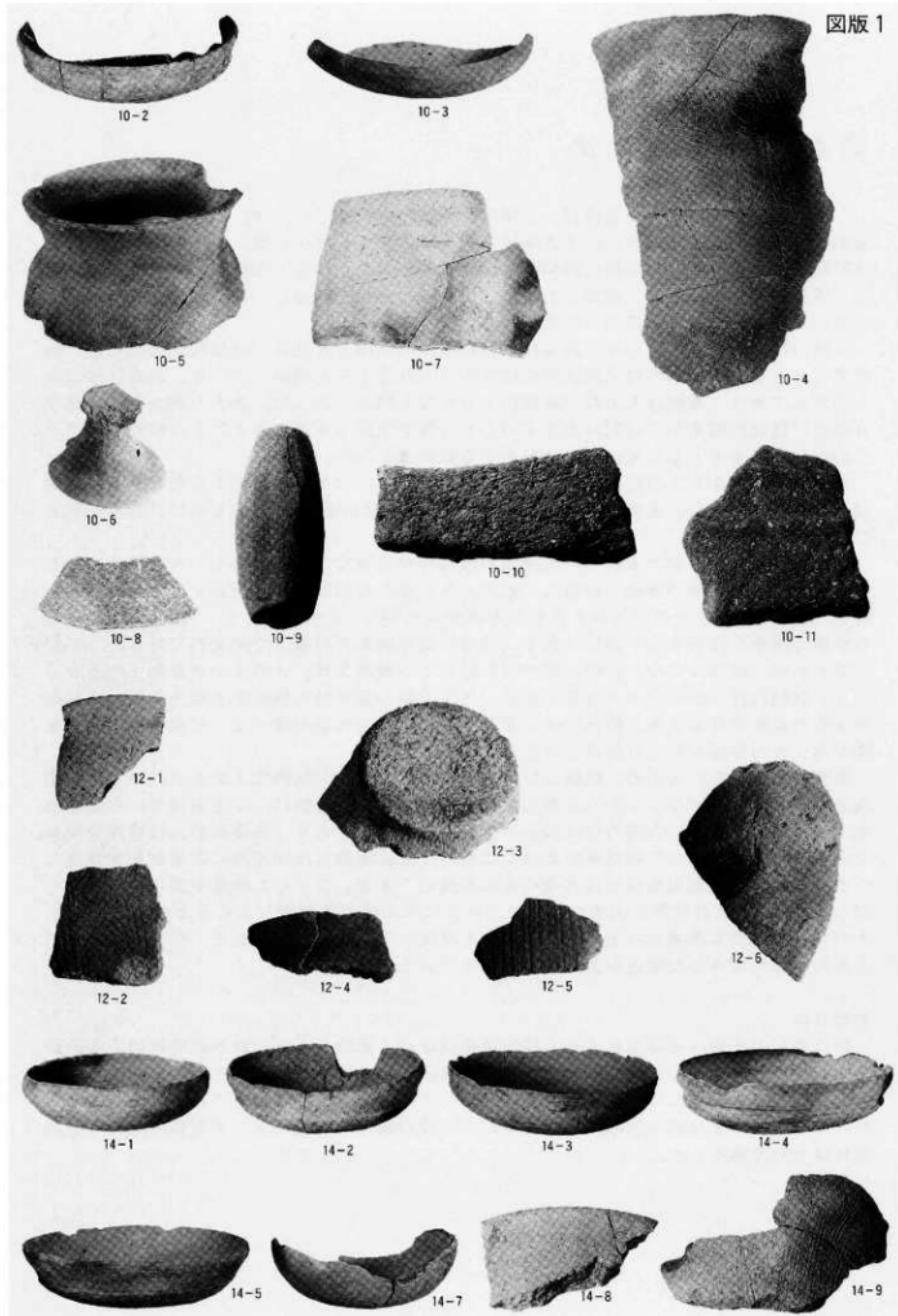
弥生時代後期から古墳時代前期及び平安時代は、僅かに土器片が出土したのみで、遺構は確認されなかった。遺物の出土は、各時期の人間活動の証拠となるもので、貴重な発見であった。

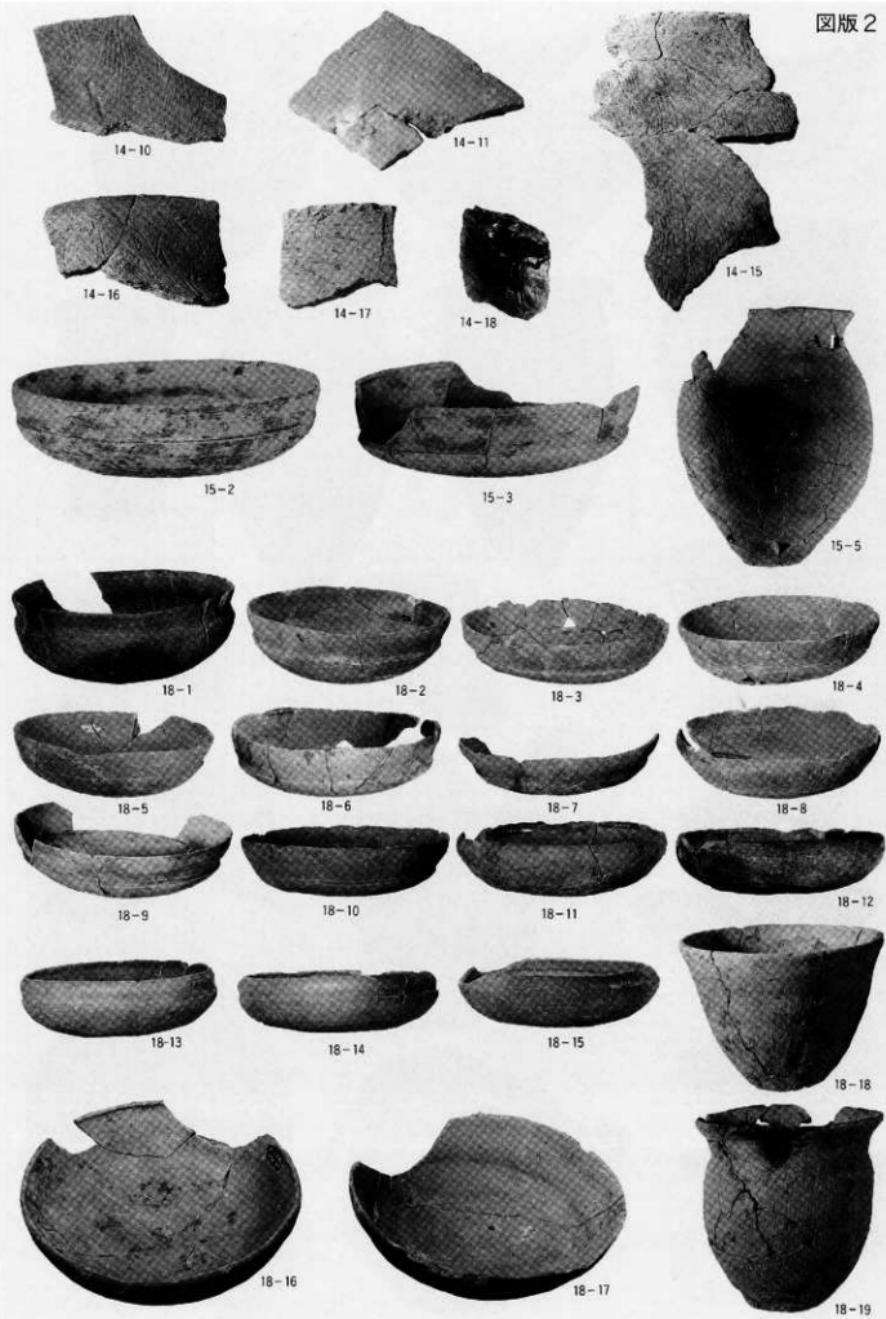
今回の調査では、検出遺構・出土遺物の大部分が古墳時代後期に属し、本遺跡の中心をなしている。住居址の規模・形態は一辺4~5m程の方形となり、特に4号住居址出土遺物は、カマド内及びその周辺から完形品が多量に集中し、入れ子状となった甕と瓶、重なった状態で出土した环など一括性が高く、当時の器種構成を知る上で好資料である。2号住居址のカマド前面からは、正位に置かれた环が4点検出され、3点までが赤彩されるなどカマド廃絶に伴う祭祀行為が想定できる。出土土器の半分は6世紀後半~7世紀前半に比定でき、検出住居に重複が見られるためこの間、二、三度の建て替えを繰り返しつつ集落が営まれ続けたと推量できる。

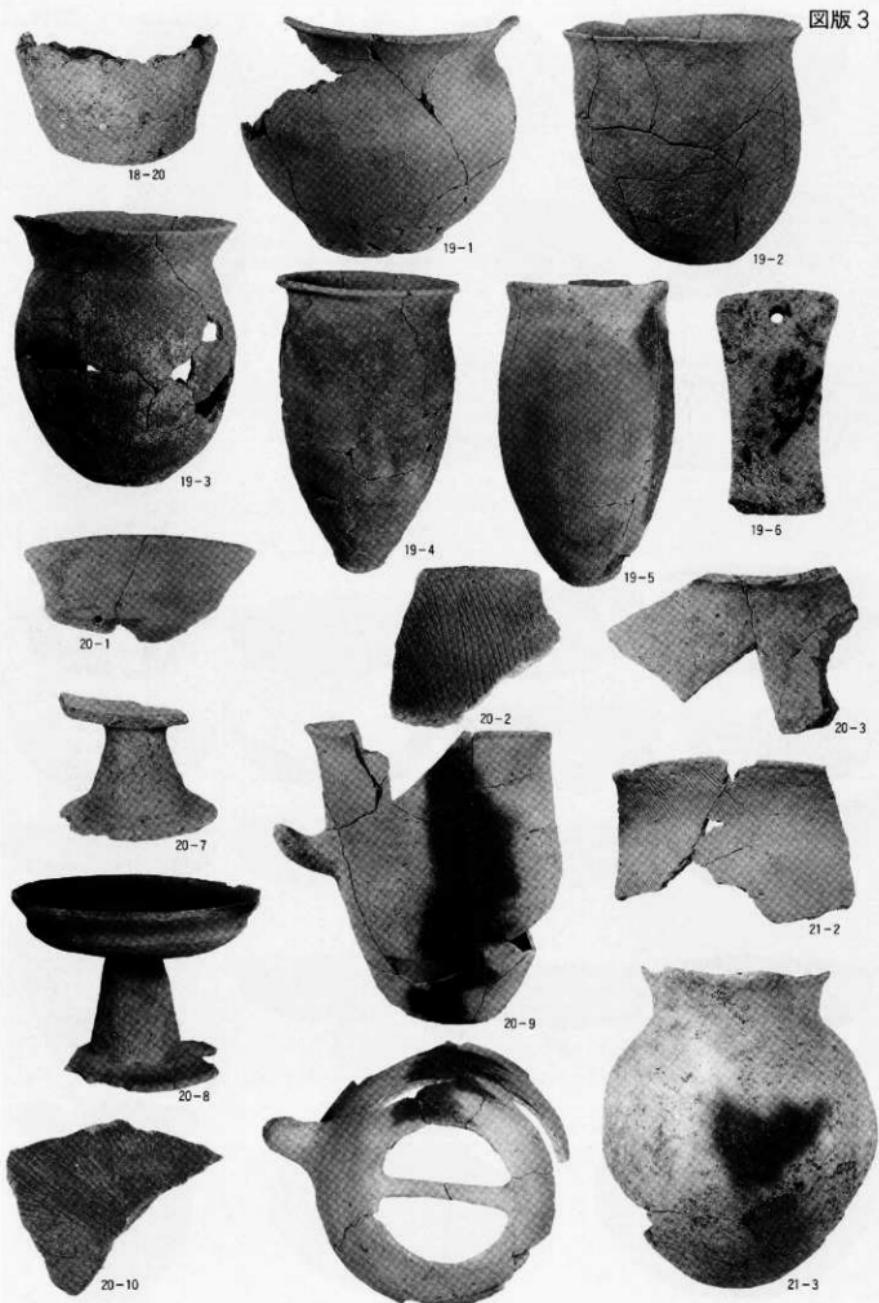
遺構に共伴しないものの、鉄鎌及び須恵器平瓶・フラスコ瓶の出土がある。いずれも調査区東辺のC-7グリッドから集中して検出した。これら遺物は、7世紀前半~中頃に比定でき、かつ一般的に古墳の副葬品として見られるものであり、集落跡出土は特異な現象である。調査地がかつて練兵場であったこと、すでに消滅したが周辺に古墳が多数存在したことなどから、調査地付近に古墳の存在が推定できる。こうした推量が妥当であるならば、集落が営まれた期間と古墳が築かれた年代に多少時間差が生じることとなる。それは、そのまま集落から墓域へと土地利用の変化を反映していると考えられる。今後の調査の積み重ねによりこうした推定がより明確となるであろう。

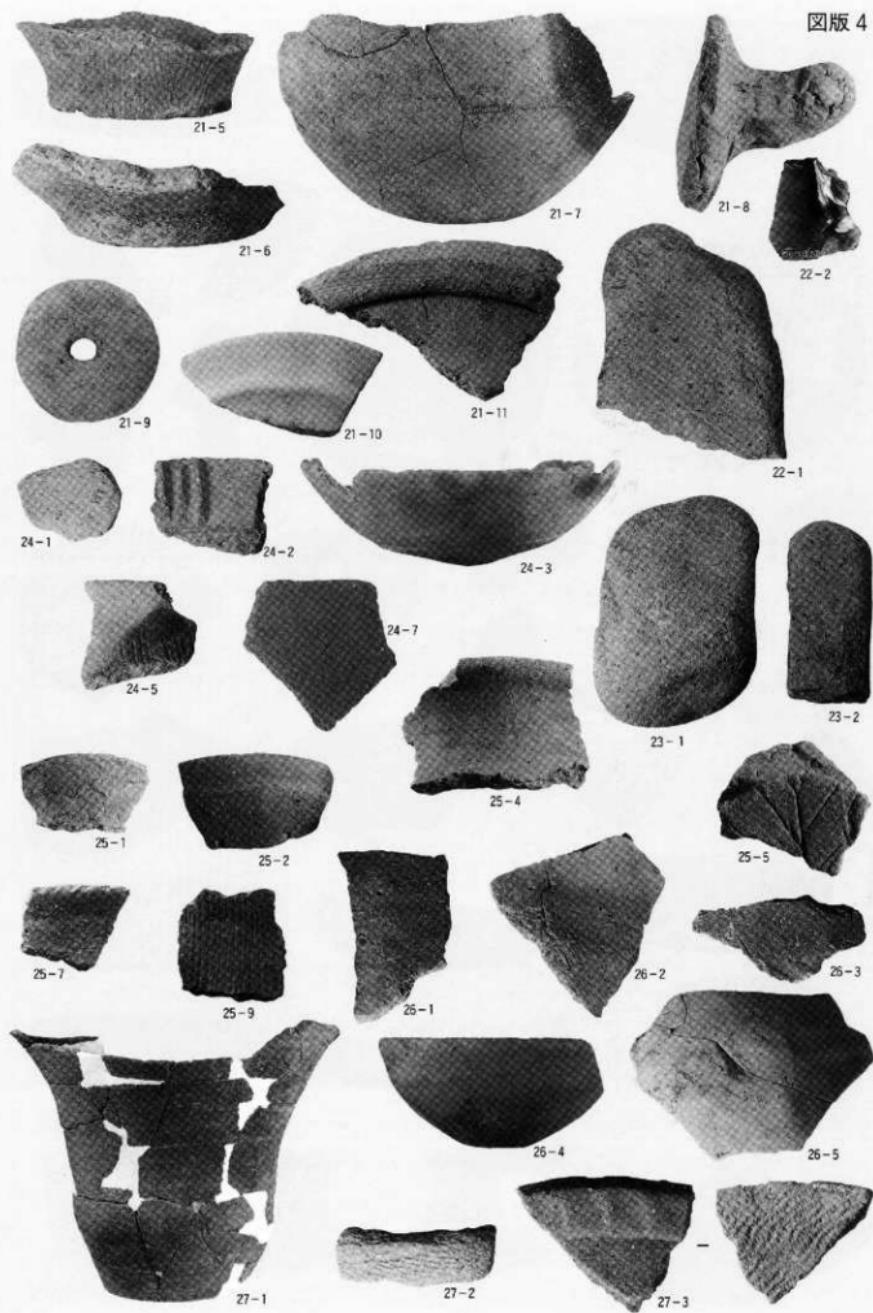
おわりに

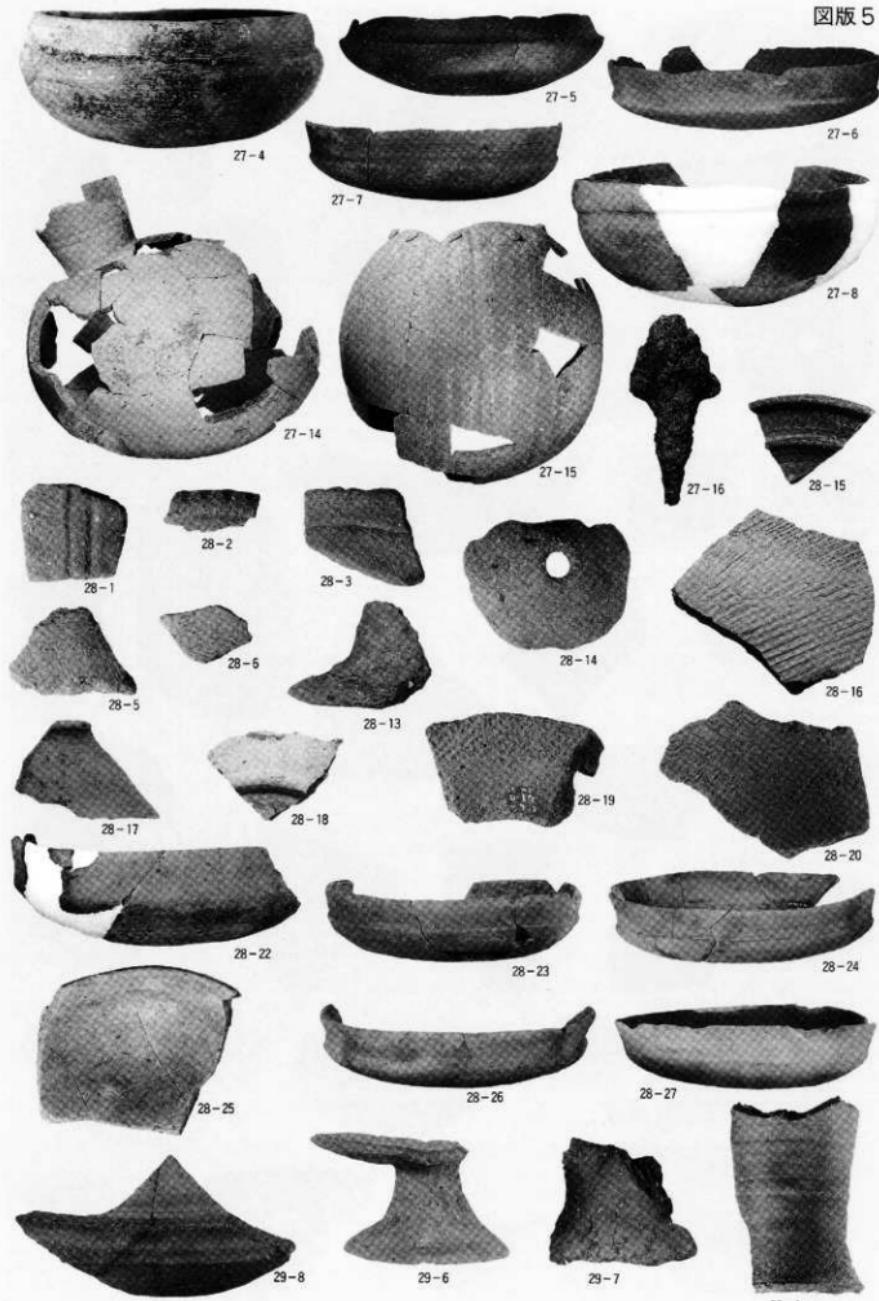
検出数・出土量の多寡はあるが、検出遺構及び出土遺物はそれぞれ当該時期の人間活動を明らかにする重要な発見であった。本報告は限られた時間の中でまとめたものであり、遺構と出土遺物を中心に資料化に努め、呈示した。調査の成果と資料の詳細な検討・考察が行われず不十分な点は否めないが、本書が今後の調査・研究に少しでも資することが出来れば幸いである。











報告書抄録

ふりがな	みどりがおかいっちょめいせき						
書名	緑ヶ丘一丁目遺跡						
副書名	集合住宅建設に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	甲府市文化財調査報告						
シリーズ番号	32						
編集機関	甲府市教育委員会						
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号 電話 055(223)7324						
発行年月日	平成18年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
みどりがおかいっちょ 緑ヶ丘一 めいせき 日遺跡	山梨県甲府市 緑ヶ丘二丁目 87-5, 87-6, 91-4, 91-5	19201	43	35° 40' 49"	138° 33' 45"	H17.7.27 ~ H17.9.28	集合住宅建設
228m ²							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
緑ヶ丘一丁 目遺跡	散布地	古墳	住居址・墓石 溝・ピット	縄文土器・土師器 須恵器・土製品 金属器・石器			

甲府市文化財調査報告32

緑ヶ丘一丁目遺跡

—集合住宅建設に伴う発掘調査報告書—

平成18年3月31日

発行 甲府市教育委員会

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号

TEL 055 (223) 7324

FAX 055 (226) 4889

印刷 舞内田印刷所

〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18

